

---

# 女神のティア

詠城カナナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女神のティア

### 【Nコード】

N7512M

### 【作者名】

詠城カナナ

### 【あらすじ】

「僕と契約しようよ？」 旅人の風体をしていたからだろうか。なんの気まぐれかしらないが、アジェは檻に入られている少年に声をかけられた。「願いを叶えてやるよ」不敵に笑む少年 彼は、人間ではないイキモノだった……。

不定期更新。

## 契約（前書き）

つつい、妄想が勢いづいて書いてしまいました笑

タイトルは一応、仮で。

後で変更するかもしれません。

終わりを二通り考えてまして、また話の傾向も少女向けにするか少年向けにするか、二通り考えてまして、どちらにするかはまだ未定です。^^

どちらにしる、少しでもお楽しみいただけるよう頑張ります。

不定期更新になるかと思いますが、お付き合いくだされば幸いです。

では、どうぞ。

## 契約

### 旅人と少年

#### 契約

「おにーさん」

鈴の音のような声がした。思わず足を止めて聞き惚れてしまうほど、軽やかで澄んだ声だ。

「おにーさん、僕のこと、買わない？」

声はまた言った。静かな深森に響く、小さなうつくしい鈴のように。そしてそれは、どこか艶やかに。

アジエはようやくと自分に言われているのだと気づき、足をとめた。見れば、錆びかけた鉄の檻に、ひとりの少年がにこにこしながら入っている。十三、四歳くらいだろうか。手には厚い手錠をかけられ、首には赤茶色の首輪をされて鎖に繋がれていた。

「ね、僕、なかなか綺麗な顔してるでしょ？ 買ってよ」

少年はあまえるように小首を傾げて言う。その愛らしい唇が語る誘惑に、アジエは顔をしかめた。

そう、少年はとても魅力的だった。

ほっそりとした身体。どこまでも深い漆黒の髪に、それとは対照的な透き通る白い肌。唇は薄い紅色で、少年ながらもどこか艶やかな雰囲気を醸し出している。なにより人を引き付けるのは、その瞳なのかもしれない……。琥珀色をした瞳は、強い光をもつてらんと輝いていた。

アジエはふっと軽く息をはくと、檻の隙間から手を入れて、少年

の汚れた頬をごしごしと擦ってやる。今はうつくしい黒髪もボサボサに肩まで伸び、ボロボロの衣服をどうにか身にまとっている状態ではあるが、きれいに洗ってやればずっと秀丽になるはずだ。

しかし……とアジエは思う。この少年は今の状態でさえうつくしい。いや、むしろ、着飾らないほうが映えるのかもしれない。

「おにーさん、旅の人でしょ」

少年はうれしそうに笑う。

たしかにそうだった。アジエは深緋のマントを着込み、重たい荷袋を肩にかけ、腰には護身用の剣をさしている。まさに今、この深い森を夜までには抜けようと、足をはやめて進んでいる最中であつた。

「ねえ、おにーさん。本当は僕、すっごく高いんだ。有能だしね。だけど、今悪い奴らに捕まって逃げられないんだよね」

べつ、と舌を出し、少年は首輪を指して肩をすくめる。

「この首輪、《獣人殺し》の薬が入ってるんだ。だから力が出せないんだよね」

「獣人？ 種は？」

アジエは思わず尋ねていた。少年はふいに口の端に高慢知己な笑みを浮かべる。

「  
孤獣」  
コジユウ

孤獣 獣人種のなかで、もつとも珍しい最強の種。この国では人間のほかに、獣人という思考を持った生き物がいた。彼らは獣顔負けの能力を持ち、人も舌をまくほどずる賢い。高い知能をもった動物だ。

しかし、当然世界の支配者たる人間は彼らの存在を恐れた。《獣人殺し》と呼ばれる薬を開発し、それを服用させたり接触させることにより、彼らの強大な力を封じること成功した。獣人には地位はない。奴隷や観賞用として人間たちに飼われることが主になりつ

つあった。

しかし、何故よりによつて伝説の獣人種・孤獣が捕まっているの  
だろう？ アジエは少年が逃げたいがために嘘をついているのだろ  
うと考えた。それに、「買って」だなんて信用できない。檻から出  
した途端、彼に殺されないと限らない。

しかしそのとき、アジエの心を読んだかのように、少年が口をひ  
らいた。

「よく見てよ。その紋章！」

少年が示しているのは、檻をのせた荷馬車に描かれたマークだ。  
両翼で王冠を抱いた鳥が、水色で描かれている。

「王家……？」

「そ。王直属の獣人ハンターによつてたかつて襲われちった」

アジエのつぶやきに、少年は黒髪をかきあげて「ついてないよね  
え」とこぼす。

きよるきよると辺りを見回し、見張りを捜してみたが見当たらな  
い。アジエは頭を捻った。普通、こういう強大な力を持った獣人を  
野放しにはしないのではないか。

そんなアジエの考えにもお構いなしに、少年はおもしろそうに笑  
つてつづけた。

「でね、僕、あんまりにも理不尽で頭にキちゃったから……王様、  
殺したの」

くすつと妖艶な笑みを消さず、少年は琥珀色の瞳をいたずらっぽ  
く揺らす。

「《獣人殺し》だって、孤獣が本気を出せばあつてないが如し。僕  
を捕まえてご機嫌な王様にムカムカしてきてさ。思わず、呪つてや  
つたんだ……」

つまり、王が呪い殺され、指揮する人間も動揺し、この獣人を恐  
れ、みな逃げ出した……そういうわけだ。

楽しそうに声をあげる少年。しかし、次の瞬間にはその愛らしい  
唇を尖らせた。

「でもお。そのお陰でこの様。あんまり頭に血が上ってたから、呪いの代償のこと考えなかつたんだ」

「代償？」

「そ。僕、すっかり疲れちゃったから、人の生气吸わないと、もう力出せないんだよね。あーあ。力使い果たすまえに、この首輪壊しちゃえばよかった」

あーあ、とうなだれる姿は、まるで幼い子供のようだ。この少年が人の命を奪ったなんて、信じられる人間はいないのではないか。

「おにーさん、買ってよ。僕と契約しようよ……大丈夫。僕、裏切らないよ？」

アジエは少年の琥珀色の瞳を見つめた。

生まれて十八年、こんなにつくしいと思えるものに、果たして自分は出会ったことがあるだろうか。

「おにーさんの目、きれいだね。それ、何色？」

「……コバルトブルー」

琥珀色の瞳は妖しく笑う。

「いいね。それで髪はダークグレーでしょ？ ……うん、すっごくイイ」

なにがいいのかわからない。しかし、アジエは少年の笑みを見ただけで、なにか埋まるような錯覚を覚えた。そう、この心の穴を埋めてくれるような。

途端、アジエはふっと笑った。

「！」

驚きに目を見開く少年。それはそうだろう。アジエは笑ったかと思つと、いきなり右手をさつと横に振り、それだけで檻を壊してしまつたのだから。

ガラガラと崩れる檻から少年が出る。アジエは近づくと、指を捻つただけでその首輪を外してしまつた。

「契約などいらナイよ」

いまだ驚きを隠せずにいる少年に、アジエは無表情のまま言葉を落とす。

「わたしが欲しいのは悲しみだ。おまえにそれが叶えられるとは思えない　去れ」

今度は呆然とする少年を残し、アジエはすたすたと歩きはじめる。その顔にはもはや、笑みも歪みもなにもない。

少年はその、颯爽と歩く後ろ姿を見つめる。すらりと背が高く、長いマントが揺れるたびに、肩にかかったダークグレーの細い髪もゆらゆらと揺れる。鼻筋は通り、眉はきりりとし、凜とした端正な顔立ちをしていた。きつと明るく笑えば屈託のない笑みが見れるのだろう。

だがしかし、その旅人の眼には暗い影がひそみ、けれどどこか光を欲しているように見えた　だから、彼は声をかけたのだ。

「本気……？」

少年はぼつりとつぶやく。その口にはすでに、呆然とする色はない。ただ妖しく、心底愉快そうな笑みを広げるだけだ。

ニツと口角をあげると、少年は旅人に向かって走り出した。

「おっにいっさん！」

そうして、思いきり彼の背に飛び込もうとした。何事かと振り返ったアジエは、自分に向かって飛び込んでくる少年に啞然とする。あまりの勢いに、ふたりはそのままバランスを崩して倒れ込んでしまった。

「……痛い」

「あれっ」

顔を思いきりしかめるアジエに対し、少年はきよとんと首を傾げる。アジエに馬乗りになっている形の彼は、そのまま無遠慮にも下敷きになっている人間の身体をぺたぺたと触り出した。

「あれれっ」

「……なに」

「まさか〜！　もしかして、おねーさん？」



少年は旅人のマントの上から丹念に胸の存在を確認すると、びっくりしたように目を見開いて聞いた。

アジエは深くため息をはく。

「そうだけど……それがなにか　ッ！」

今度はアジエが目を見開く番だった。あろうことが少年は、喋っていた途中のアジエの唇を、自らの柔らかい唇で塞いだのだ。

「〜ンウッ！」

そのうち、身体から力が抜けていく。頭はぼうつとし、目はとろんとする。足の先から指先まで痺れてくる。呼吸も荒い。

まさか、これは

意識を手放しそうになったそのとき、ようやく少年は唇を解放した。

「ごちそうさま」

額をくつつけながら、彼は上機嫌でにっこりと笑う。

アジエはまだ力の入らないダルい身体に鞭をうち、少年を押しつけ、上半身を起こして言った。

「……せ、生気を吸ったな……？」

「もちろん」

ふふ、と笑いながら、少年はアジエの頬に指を滑らせる。

「男の人とのチューには抵抗あったからさ。自由になったら殺して心臓まるごと喰べちゃおうと思っただけさ」

少年の手が、アジエの心臓のあたりをうるつく。

「でも、なんか変なこと言っし。まあいいやと思って、おにーさんとチューする決心したんだけどなあ」

アジエの顎に手をかけ、「おねーさんだったんだね」と彼は不敵に笑う。

「僕、ついうれしくって、止まらなかったあ。ごめんね」

「ふざけるな」

少年の手を払い、アジエは声をあげる。けれどそんな彼女の顔に

すら、怒りの表情はなく、無に近い。

「わたしの邪魔をするなら、わたしは」

「まあまあ。契約しましょうよ、おねーさん」

いたって余裕の笑みで少年はつづける。アジエのダークグレーの髪に軽くキスを落として。

「僕の名前はエダ。貴女に素敵な悲しみを贈りましょう」

( 1 )

王女と王子

( 1 )

こんがり焼けたトーストを口いっぱい頬張りながら、彼は「おかわり」と完食した皿を亭主に差し出す。つづいてカゴにのった林檎を引つつかむと、愛くるしい笑顔をふりまいてかぶりついた。

「おいし〜！ 久々に生きてるって気がする」

亭主は半ば呆然としながら少年から皿を受け取り、本日五度目のおかわりに料理を盛りつけてやった。

ここは裏通りの酒場だ。普段は廃れかけた場所独特の雰囲気がある。表通りは華やかに活気づいているが、裏通りでは人相の悪い連中が、見た目を裏切らない働きをしてくれるおかげで、一般の人間は寄り付かなくなっている。

ここへ来るのは、表に顔を出せない人間などのワケアリな連中で、子供などが来ていい場所ではなかった。だいたい、ここは酒場だ。成人前の子供がひとりできていいはずはない。

もちろん亭主だつてそれくらいは知っている。しかし少年がひとりで店に入ってきたとき、彼は驚きすぎて注意をするのを忘れてしまったのだ。

それにしても、少年は愛くるしい容姿をしている。髪はボサボサだが、櫛を通せばさらりとして艶が出るにちがいないし、肌は陶器のようになめらかだ。「ぷはっ」とワインを飲み干し、幸せそうにほほえむ様は、まさに天使

「 ！ ちよ、ちよっとお客さん！ 」

亭主はあわてて妄想をやめ、少年に声をあげた。

「あ、あんたまだ未成年だろ?! ワインなんて飲んじゃいけねーよ!」

すると少年は一瞬きよとんとしたが、すぐに怪訝な顔をつくって口をひらく。

「年でいえば、僕だってもう成人に等しいんだから。馬鹿にしないでよね。それに、ワインをくれたのはおじさんじゃない」

亭主はハツとする。ここは酒場だ。「飲み物ちょうだい」と言われても、酒しかない。どうやら自分は少年を見つめすぎて、気づかぬうちにワインを渡してしまっただらしい。

はあ、と彼はため息をこぼし、少年に言った。

「まあ今回はいい。俺のミスだ……が。金はあるんだろーな? そのワイン、特上なんだぜ。それにあんた、食い過ぎだろ」  
頬をぷーつと膨らませ、少年は丸々した目をまたたく。

「知らない。そのうち来ると思うから、連れに聞いてよお」  
言うや否や、彼は再び食事に戻る。いったいこの華奢な身体のごに、こんな大量な食べ物を読み込めるのだろうと、訝らずにはいられないほどだ。

亭主は尽きないため息をこぼす。

と、そのとき、入口のベルが鳴り、新たな客の来訪を告げる。今度はちゃんとした客だ。三人のいかつい顔をした男たちであった。

「よお。久しぶりじゃねえか」

亭主が声をかけると、客のひとりが太い眉をあげて応じる。

「ああ。ちよいと仕事ができてよお。今日は金が余ってた。たくさん飲んでくぜ」

「それにしても、外はえらい騒ぎだ。おやつさん、知ってるか?」  
「おかげでこの裏通りにも監修の目が入りそうだぜ」

もうふたりの客も話に加わり、それぞれカウンターの席につく。

「ああ、知っているとも。例の事件だろ。ここいらじゃ、専ら話のネタはそれに尽きないがね」

「そうそう。アリス王女が城から逃げ出したんだろ？」

「金持ちの考えることはわかんねえな……おい、あの客はなんだ？」

「お城が退屈で逃げ出したんじゃないかねえか？ ……それにしても、美人だな。まだガキか？」

「きつとそうだろ。そのせいで、城からの搜索兵がこの辺りをうるつくようになるのも時間の問題さ……チツ。男か。女だったら抱いてやったのによお」

客らが少年の存在に気づき、いやらしい笑みを浮かべはじめたのを見て、亭主は深いため息をこぼす。そう、あの少年はきれいすぎだ。なにか問題が起こるのではないかと、かすかな不安がよぎる。

「おい、お客さんよお。頼むから、そういうのは店の外でやってくれよ」

「まあまあ。わかってるって」

亭主の出した酒をぐいと喉に通し、男たちは満足そうな笑みをもらす。

「なあ、もしアリス王女を見つけたら、なにか謝礼金みたいなもんはくるのかな？ ……それにしてもよく食うな、あのガキ」

「あつたりめえだ！ 一生働かなくていいだろうぜ……でも、男のくせに色っぽいな」

「いらつしやい」

また店のベルが鳴ったので、亭主は入ってきた客に言葉をかけた。今日は客がよく入る。まだ昼間だというのに。

「そついや、あれだ。王子さまが躍起になつて捜しているって話だ……なあ、声かけてみるかあ？」

「大変だよな。わがままな女を妻に持つとさ……あれだと、男でもいけそうだな」

ニタニタと笑みをもらす男たちは、そつと席を立とうとしたのだが。

「おい」

先程入ってきた客が、そのとき声をあげた。怪訝な顔をする男た

ちに向かって、旅人のような客は、懐から出したコインをはじき、見事男の手におさめる。

「……その話、詳しく聞かせてくれ」

客はフードの奥から、コバルトブルーの瞳を光らせ、そう言った。

(2)

(2)

少年は実に不愉快だと言わんばかりに頬を膨らませ、足早に歩を進める旅仲間のマントを引っ張った。

「どういうつもり？ さっさと店を出ようと言ったり、ひとりで楽しんでりさあ」

「楽しんでつもりはない。あれは邪魔だったから仕方がない」  
「よく言うよ」

ちえつと肩をすくめる少年は、しかし面白そうに含み笑った。彼女に言われ、昼食を食べ終わる間もなく早々と店を後にしようとしたそのとき、店の客に声をかけられたのだ。あまりのしつこさに辟易した彼女は、情け容赦なく声をかけてきた男たちを殴って地へと伏せた。「きれいだね。うれしいことしようぜ」と誘われたのは、彼女ではなく彼のほうなのだ。

当の彼はしかし、断ることをしなかったのだ。「どうしようかなあ〜」などとしなをつくり、あきらかに挑発していたのだ。そんな少年に苛々したが、なんとか彼を殴ることだけは我慢し、よってそのとぼつちりとも言うべき怒りは男たちへと向けられたのだった。  
「あーあ。せっかく生氣いただこうと思ったのに。アジエが邪魔して楽しそうに殴っちゃうんだもん。僕な〜んにもできなかったあ」  
「獲物だったわけか……それにわたしは、楽しんでなどいない」

少年の言葉に、アジエは深く息をつく。彼にとって破壊は喜びなのだろう。……それにしても、あの男たちはなんと幸運なことか。

殴られただけで、生気を吸われるという危機から脱したのだから。

「おまえは自分の容姿を自覚しろ。マントをかぶれ」

買ってきたマントのフードを無理矢理かぶせ、アジエはさらにため息をつく。極力目立ちたくはなかった。なのに、彼と行動をとみにすればいやでも目立つ。

しかし、少年は彼女の憂いを知ってか知らずか、思わず見とれるほどの柔い笑みをこぼした。

「僕はアジエのほうがきれいだと思うよ……それに、名前で呼んでくれるとうれしいなあ」

「名を呼べば言うことをきくのか」

契約をしてしまったことをはやくも後悔しつつ、アジエは問う。

すると少年はやや考え込むように眉根を寄せていたが、やがて不敵ともとれる笑みを彼女へと向けた。

「それも悪くないかもね」

なんと魅力的な笑みだ。その琥珀色の瞳を揺らして、口の端だけをわずかに上げて微笑する蠱惑さに、惑わされぬ人間などいるのだろうか。

だがしかし、アジエは無意識に寂しそうな笑みを一瞬浮かべたあとで、そっと少年の頬に触れた。

「エダ」

声はやや低く、あまい。本人には自覚はないだろうが、この声で囁かれればそこいらの人間を骨抜きにすることも可能だろう。少年はそう思い、そして同時にもったいないなと感じた。

彼女の外見は美青年そのものであった。すらりとした長身で、その長い前髪からのぞくコバルトブルーの瞳はやや冷たいが、それがストイックな雰囲気の魅力を引き出している。エダだって、彼女の思いの外ふくよかな胸を触らなければ気づかなかった。もし彼女が本当に男であったなら、女には苦勞しない生活を送れたであろうと



思うと、彼女の性別は実にもったいなかったのだ。

再び足をはやめに動かしはじめたアジエにつづき、名を呼ばれたエダも素直に歩いていく。いったいどうして急に急ぐはめになったのかそのいきさつは皆目わからなかったが、エダにとってそんなことはどうでもよかった。アジエと契約した、そばにいたい、だから彼女の隣を歩く　それでいいのだ。

「そういえば、なんか卑猥だね」

それまで黙って彼女のあとにつづいていた少年が唐突に口を切ったのは、ちょうどアジエが色街の看板のかかっている道角を曲がるうとしたときであった。

怪訝そうに顔を歪めるアジエに、エダは肩をすくめる。

「その看板だよ。もしかして、アジエは僕とそういう関係になりたいとか？」

少年にとつて、彼女と関係を持つことはとりたてて拒絶すべきことではなかった。しかし、あきらかに彼女はそういった関係を拒むだろうことは容易に想像できていたため、どうして色街などに足を運ぼうとしたのか疑問に思い、エダは口をひらいたというわけである。

アジエは予想通り、眉間にシワをよせて『つまらん冗談を』という顔をして応えた。

「ふざけているのか？」

「ちがうよ。でもさ、気になるんだもん」

ぷう、と頬を膨らませて、少年は頭のうしろで手を組んだ。

「さっきから、なにをソワソワしているわけ？」

アジエは少年の言葉にサツと顔をしかめ、しまったとばかりに口をおおう。だがすぐに、小さく舌打ちしたあとで口をひらいた。どうやら秘密にしておくことではないらしい。

「おまえも聞いていただろう？　あの男たちの話」

「アリス王女のこと？」

裏道に入ったところで足を止め、暗がりの壁に背を預けて、アジエは腕を組んだ。どうやら長話になるらしい。

「そうだ。アリス王女の脱走……そしてきつと、王子は彼女を求めてくるんだろっな」

エダは小首を傾げた。たしかに先ほど店で、彼女は男たちに『アリス王女』の話を尋ねたのだった。もちろん、金を払って。

だが、エダにはアジエがなぜアリス王女に興味をもつのかわからなかったのは事実。もし、アリス王女を無事保護して王宮に届けることができれば、莫大な謝礼金が手に入ることだろう。だが、アジエにはそういった金に関する欲求は無縁に思える。正義感から彼女を捜し出そうとしているようにも思えない。だから、なぜそんな情報を欲したのかが不思議でならなかった。

「まさか、王子さまに会ってみたいとか？」

「いいや。むしろ会いたくはない」

ふるふると首を振って否定する彼女に、エダはふうん、と肩をすくめる。じれったい。いったい、どういう意図で彼女はどこへ行くとしてしているのか。

だいたい、色街に行く意味がわからない。アリス王女となんの関係があるのかもわからない。わからないことばかりで、エダは若干イライラした。

そして少年は、その苛立ちを隠そうともせず、むしろ責めるようにアジエに目を向け、口を尖らせた。

「おねえさん！ 僕、さっぱりわかんない」

「……貴様、男たちの話は聞いていなかったのか？」

「聞いてたよ！ 聞いてたけど、興味なかったもん。それに僕は目の前のおいしい誘惑には勝てなかったんだもん」

ちょこん、と小首を傾げていじける仕草をする少年は、実に愛らしい。上目遣いの絶妙な角度は、彼をさらに可憐に見せる。そしてそれをわかっていて実行する性格は実に腹黒いことこの上ない。

アジエはため息の入り混じった声で「このガキ」とつぶやく。

つまり彼は、アジエが男たちから情報を聞き出しているのを耳に入れてはいたが、話声は見事に耳を素通りし、少年は食事を平らげることにも夢中であつたというわけだ。

「まあいい。一から話してやる」

冷静になれ、と自らを律し、アジエは腕を組み直した。

「わーい。でもさ、さっきまで急いでいたのに、こんなにのんびり話なんかしてもいいわけ？」

「……問題ない」

悠長に振る舞える時間はない、はずだった。いついだれのせいで時間を食っているつもりか、という文句をなんとか飲み込み、アジエはいつもの、何物にも動じない無表情をつくって、少年を見つめた。

「そう、問題はない……おまえにも手伝ってもらうことにした」

はじめは自分ひとりで終わらせるつもりだったが、気が変わった。時間を食った見返りは倍にして頂く。アジエは無意識に、心の内で笑みをもらした。

(3)

(3)

アリス王女 スワズレット王国の王妃にして、国の宝とされる存在。彼女には不思議な力が宿り、この世界を破壊することも創造することもできる神のような存在。

この国には、王家の掟ロイヤルルールがある。その禁忌は決して破ることは赦されず、何者にも侵し難い絶対なルールであった。

建国してからずつとつづいている伝統 アリス王女制度。彼女の絶対的な力の前には、どんなことも無に等しい。強大な力を秘めた存在、それがアリス王女だった。

アリス王女に選ばれた少女には、力が与えられる。そして同時にその凶悪にすらなりうる力を封じるため、少女からは『なにか』が奪われる。その『なにか』はいわゆる力のストッパー。アリス王女は『なにか』を奪われる代わりに、地位と名誉、そして無限の愛と強大な神の力を与えられるのだ。

アリス王女は民から尊敬され、王からは愛され、幸せに暮らす。大事に大事に育てられ、守られて生きていく。

不幸や不満など、生じるはずもない。

「……それなのに、今回彼女は城を逃げ出した。どういうことだろう……」

アジエはまったくといっていいほど話のわかっていなかった少年に、アリス王女のこと、そして男たちから「アリス王女を色街で見かけた輩がいる」という情報を聞いたということを教えてやっていた。

いまいち城を抜け出して色街へ赴く経緯が見えず、眉根を寄せて唸るアジエに、エダはあつけらかんとした調子で言った。

「脱走したい気持ちなら、わかるなあ！ それにそういう理由って、たくさんあるじゃん」

「だが、彼女は城の外へ出たことがない……なぜ色街なんか……」  
「駆け落ちじゃない？」

ヒューツと口笛を吹いて、肩を揺らす少年。アジエは目を細めて、そんなふざけた態度を取る少年を極力視界に入れないように努めた。「そんなはずはない。ありえない。言っておくが、アリス王女の夫となられるロナウド王子に敵う男など、そうそういないだろう」

「へえ。そんなにいい男なの？」

エダははじめて興味を示す。若干身を乗り出し、アジエの顔をしげしげとながめた。

「申し分ない。ルックスも性格も上等だ。民で彼に憧れぬ女はいない」

淡々と述べる彼女に、エダの眉はぴくりと動く。

様子が変だ。というか、怪しい……アジエは思わず顔を歪める。

実際、ロナウド王子の見目麗しさは国でも有名な話であった。他国からは是非妃にと、求婚を求む姫君たちが絶えないらしい。

彼の父でもあるスワズレッド国王は、なかなか子供に恵まれず、息子はロナウドただひとりであった。加えて国王自身にも兄弟はいなかった。そのため世継ぎもなんの争いもなく決まり、ロナウド王子も王になるべく日々励んでいた。

スワズレッド国はここ数世代に渡って大きな戦争はなかった。民は善王をたたえた。国は平和だったのだ。

そうして人々は言う　ああ、これもすべて、アリス王女のおかげだ、と。

それはただの神話にすぎぬのかもしれない。アリス王女がいれば、国はいつまでも平和などということとは、どう考えても現実離れしている。だが、とアジエは考える。

ロナウドが王になれば、アリス王女の力など関係なしに、きっと国はすばらしく栄えるであろう、と。

「おねーさんが、そんなに異性に対して語るなんて思わなかったなあ」

ふと我にかえれば、挑戦的なまなざしをした少年が目の前にいた。アジエは顔をしかめて見つめかえす。

「なにを……」

「ねえ、おねーさんもそう思う？ その王子さまって奴が、だれにも敵わないって」

アジエは目を見開いた。

「そうだ。そういえばこいつは、王家に捕われていたのだ。王を殺した、ということ、ロナウド王子の父を殺したということ。まだ町で戴冠式の話は聞いていないが、近いうちにロナウドが王となるのだろう。」

この少年は、恨みをもつのだろうか。王となったロナウドをも殺そうとするのだろうか。

アジエは無意識に、生唾を飲み込んだ。そして震えた。恐れからではない、怒りから。

「妬けるなあ」

だがしかし、少年は彼女の予想を裏切り、瞳を楽しげに揺らして言った。

「この俺様より美形だったの？ 本当に？」

口の端だけで笑う少年は、今まで見ていた彼とは別人のようだった。その眼は誘うように、色香を放っている。

それに今、彼は自分のことを『僕』ではなく『俺様』と言った。はたして、この無垢そうに見える少年の裏にはなにがひそんでいるのかと、アジエはなんとなく興味をもってしまった。

エダはアジエの顎に手をかけながら、じつとそらすことなく、その色の瞳を向けて不敵に笑む。だがしかし、しばらくしても女の顔に戸惑いやら恥じらいといった感情が微塵も表れないのを見て、大

袈裟にため息をこぼした。

「おねーさんさあ、もうちょっと反応してよ。ときめきとか、しないわけ？ 僕、自信なくしちゃうな」

「なにを……」

「たとえば顔を赤らめるとかさあ！ 僕の顔が間近にあってもそんな無反応なの、おねーさんくらいだよ？」

頭大丈夫？ とかわいく首を傾げて言う少年に、アジエは殴ってもいいだろうかと悩んだ。

もともと反応が薄いのは生れつきだ。だが、周りの人間からそれをとやかく言われたことはない。いや、ひとりだけ。たったひとりだけ、彼女に「笑顔」を要求した者がいた。

「……わたしはまだ、うまく笑えてはいないな……」

「ちよ、ちよっと！ アジエってば、すんごく失礼な人間だね！ 普通、人の話の最中に物思いに耽らないでしょ」

我にかえれば、まだ幼さを見せる少年が口を尖らせて、アジエの身体をバシバシとたたいていた。あわてて謝ると、ようやく攻撃をやめてくれる。

「いいよもう。どーせ、アジエは普通のヒトじゃないんだし」

「……どういう意味だ」

眉をひそめる彼女に、エダはお返しとばかりに深く笑んだ。

「言葉通りですよ」

(3) (後書き)

次回から文字数増やします。

そして動きも出てくるかと思えます^^

のろのろ不定期更新ですみませんが、よろしくお願いします！



(4)

(4)

空は赤くなりはじめていた。色街が徐々に活気づく頃合いだ。

エダは物陰に身をひそめて『彼女』を待つアジェの後ろ姿をぼんやりながめながら、ふと物思いに耽っていた。そう、あれは王家直属のハンターに捕らえられたときのこと。

お世辞にもハンサムとはいえない、太った王だった。欲望によって曲がったような鼻が特徴的で、エダは捕われの身であるにも関わらず、つい笑ってしまった。

王は捕らえた獣人をしげしげと見やると満足そうな顔で家来に告げた。「これであやつの方は埋まる。我が国ももうすこし生きながらえることができる」と。

エダはすぐに、なにかあると思った。だからしばらく観察することにした。

王はさらにつづける。「愚息はすぐに殺してしまえ。あの女も殺してしまえ」そうしてあわてて、欲望にまみれた笑顔で家来たちに命じたのだ。「だが、力は殺すな。生きて捕まえる。そうして余の後に迎えてやろう」と。

エダは首を傾げる。獣人殺しの手錠が気持ち悪くて仕方がなかったが、それよりも、この人間が自分を捕らえてどうするつもりなのか知れたかった。

王はふいに檻に入った獣人を見ると、ニヤニヤ笑いを強めてつづける。「そうだ。後に迎えたあとで、あの女とこの化け物を支配さ

せてやるう。きつと産まれてくる赤子は、凄まじい力を秘めているにちがいない……」彼は汚らしい指を獣人の頬にのばしてニタニタと笑みを広げる。「そうすれば用済みだ。女も獣も邪魔なら殺せばいい。よし、そうしよう……」

ハツと息をはき、エダは目をとじて肩をすくめた。所詮、人間の考えることなんてこんなものだ。力を持つ獣人を従えようとするだけなのだ。

馬鹿らしい。それに、苛々する。

手首にひしめく重たい手錠にチラと目を走らせ、エダは再度ため息をこぼした。

邪魔だ。

そうして、呪いをかけはじめ。欲に溺れた人間に、最大級の嫌がらせをしてやるのだ。死をもって、自分を捕らえた罪を償わせてやるのだ。

このとき獣人の少年は、囚われてからはじめて深い笑みを見せた。

「エダ」

ふいに名を呼ばれ、少年の意識は覚醒する。ずいぶん呆けていたようだ。

「なに？ お目当ての人？」

途端にはあつと顔を輝かせ、エダはアジエの背中に飛びつく。その勢いにやや前のめりになったものの、彼女は踏ん張って身体が傾くのを防いだ。

「ム。アジエってば、力あるんだね。やんなっちゃう」

押し倒そうとしていた少年は不敵ともとれる笑みを浮かべていたのだが、今のアジエには構ってなどいられなかった。あとでたつぷり叱ってやるうと心に決め、されど今はそれどころではないのだと少年に向き直る。

「あの娘を捕まえてこい」

「どーれどれ？ あ、あのかわいい子？」

アジエの視線を追うまでもなく、エダには『彼女』がわかった。ふんわりした淡いピンクの、この場にはそぐわない上品なドレスを身に纏った少女がいた。ブロンドのゆるくウェーブのかかった髪は腰まで流され、丸い大きな瞳はまだ幼さが残る。けれど白い肌と赤い唇が印象的で、この色街では 否、城下ではどこだって場違いな格好なのだが いやでも目立ってしまう。

エダは任せなさいとばかりに、軽くウインクした。

「気をつける」

「ん、もちろん！」

走り出した後ろから、やや気にかけてたような声を聞き、エダはちよっぴり優越感を覚えた。彼女が心なしか心配してくれるのは、身を案じてであろうか？ それとも単に、少年という存在自体が というより彼の性格が 心配なのだろうか？ どちらにしろ、エダは前者だろうとしか思わなかったのだが。

エダは足をゆるめ、しかし軽快に進む。

『彼女』は目立つ。あきらかに周りの人たちは、彼女を色街特有の目で見ている。陰で数人の男がなにやらニヤニヤしながら話しており、今すぐにも『彼女』に声をかけそうだ。

そして案の定、エダには汚らしいとしか言いようのない、欲望を隠そうともしない笑みを浮かべた男たちが数人、『彼女』を囲った。腕をつかまれパニツクに陥ったのだろう。『彼女』は「やめてください！」や「わたしは人を捜しているんです」や「気安く触らないで！」などと、余計に男たちを煽るような声をあげ、さらには目にたっぷりと涙を浮かべた。

「大丈夫、怖くないよ？」

「そうそう、気持ちイイだけなんだからさ」

ゲラゲラと笑いながら、男たちは連なる店のどこかへ『彼女』を引き入れようとする。ここは色街なのだから、そこいらじゅうに並

ぶ店はすべてそういつた関係のところだ。場所に困るはずもない。  
『彼女』の瞳が恐怖に震える エダはここぞとばかりに舌なめずりし、颯爽と『彼女』の前へ飛び出した。

「待て待ておまえたち！ か弱いいたいけな乙女になにをする！」  
手を振り上げ、娘を庇うようにそう言えば、すぐに男たちは反応した。

「なんだおまえは？」

「ガキは引っ込んでろ！」

そんな罵倒を浴びながらも、少年は意に解さないように、柔く笑って彼女を和ませる。男たちに捕らわれていた腕を開放し、安心させるようににつこりすれば、たちまち彼女は顔を赤らめた。

「ふざけるな！」

逆上した男たちは鋭い拳を幾度となく少年へ撃ちこむ がしかし、彼はひらりひらりとかわしていき、ついには可愛い顔からひとにらみを投げつければ……たちまち男たちは震えあがり、「おぼえてろよ！」と泣きながら退散するのであった……。

「うーん、完璧！」

脳内で繰り返し広げられる妄想にゴクンと唾を呑み込み、エダは満足気に目を細める。そしていざゆかんと、涙をこぼす少女の前へと出て口をひらいた。

「待て！ 貴様ら、そこを動くな」

エダは手を振り上げて口をひらいたまま、その口から出ることのなくなった言葉を呑み込む。少女を守るように出て行った姿はむなしく、どこからか冷たい風が吹いてきそうだった。

いざ！ と勢いもよく少女のもとへ出たエダであったが、考えたせつかくの台詞が言われる前に、茶色っぽい黒髪の男が現れたのだ。彼は唾然とするエダをよそに、「待て！ 貴様ら、そこを動くな」と言うや否や、男たちの前に立ちはだかつて、鋭く大きな剣をかざ

していた。

「この方に触れた罪は重いぞ！ だいたい、女の子はやさしくが基本だろうが！」

「なんだおまえは？」

「邪魔するな！」

エダの台詞を悉く奪っただけでは飽き足らず、どうやら彼は少女を護る騎士<sup>ナイト</sup>役までかつさらつつもりらしい。顔を真っ赤にして、手にナイフやらの武器を持った男たちと戦う憎き男の姿をながめながら、エダは肩をすくめて両手をあげた。

「オーケー。それじゃフェアにしようよ」

だれも聞いちゃいない。ナイトは今、男たちを懲らしめる真っ最中なのだから。

けれどそんなの、エダには関係なかった。

「僕はまだ子供だし？ いいよ、別に。剣でカキンなんて、カッコいいことできないし。うん、でもいいよ、別に。アンタはそのむさくるしい男たち相手に無駄な汗を流せばいいんだ。そして僕はこの可愛らしい女の子を慰める係りに徹しようじゃないか！」

言うや否や、くると少女へ振りかえり、安心するようなあまい笑みを顔にはりつける　　が。

「なにをブツクサ言っている。来い！」

頭をガシリと捕えられ、エダは笑顔もむなしく、『彼女』とともにアジエに連れられ、騒がしくなった色街を後にした。

「さあ、もう大丈夫ですよ、お嬢さん？」

男たちをやっつけ、緑の瞳を細め、キラリと光る白い歯を見せて笑い振り向けば……

「バカ」

なんとも冷ややかな目をした女がいた。先ほどの、ブロンド色の髪をした上品な娘ではない。彼女は赤みがかった髪をひとつに結び、

クリーム色の軽装に身を包んでいる。肌は色白で、薄い唇はぎゅっとひき結ばれていた。

騒がしくなった色街。こんなところで騒動を起こすとは、まったくバカであると思いつながら、彼女は野次馬どもを一瞥し、退散させる。それにしても、目の前の男にはため息しか出ないから驚きだ。

「ディオーン。さっさと支度して」

ナイト役に徹していた男をディオーンと呼び、ふうとため息をこぼす。そのままこげ茶の瞳に軽蔑を込めて男に投げかける彼女の名は、カトリーナ。

せつかく助けようとした娘がいないことに愕然としていたディオーンも、彼女の一言でやれやれと舌うちまじりに立ち上がり、ぐんと伸びをした。

「獲物に逃げられちゃ、意味ないよ。バーカ」

「うるさいな！ って、え？ あのかわいい娘、獲物だったのか？」

「……知らなかったの？」

さらにあきれ果てるカトリーナ。まったく、相棒は惚れやすいバカである。

めずらしく、カトリーナは柔い笑みを見せ、歩き出す。

ディオーンもそれをあわてて追い、ふたりは色街の闇へと消えた。

(5)

(5)

「へえ、本当かよ!」

なにやらざわめいている店内。まだ日も高いうちから酒を煽っているのは、無精ひげを生やした男だ。

「本当さ。俺あ、聞いたね。失われた国の王子さんが、かわいい力ミさん連れて逃げてるのさ」

「失われた国つて、たくさんあるよなあ。まあ、ロナウド王子さんは好きだけどさ。先代の王さまは、ちよつと狂つてたよな」

支給係の少年は、興奮気味に相槌をうつ。

「侵略しては領土を広げてよ? アリス王女以外になにを望むんだつての!」

「ほら、あれだろ。アリス王女は息子の嫁だから手出しできなかったんだよ。で、八つ当たりじゃねえか?」

「ぎゃはは、と笑い、また二、三人の男たちが酒を片手に話に混ぜる。」

「失われた国の王子さんもさ、復讐に燃えてるんじゃないか? ロナウド王子はとばっちりつてわけだ」

「ところでなんでアンタはそんなに興奮してたんだよ?」

メガネをかけた、髪の薄い男が支給の少年に尋ねる。すると彼はよくぞ聞いてくれましたとばかりに声を発した。

「それが、復讐意欲に燃えた失われた国の王子さまが、この国にきてるんだよ!」

「へえ! それで?」

「ほら、先日アリス王女が城を抜け出したって噂があっただろ。で、なんでも偶然見かけた失われた国の王子さまが　アリス王女を口説いていたらしいんだ」

「なんだって?!」

興味深そうに、男たちは身を乗り出す。

「それも、色街で!」

「ほ、本当かよ?」

「ロナウド王子はどうすんだ?　戦争でもはじまるのか?」

「バカ!　相手は財力も兵力もない、失われた国の王子だぞ」

店内の客はさらに騒ぎ出す。すると、先ほど情報を提供した無精ひげの男が、ひとつニヤリと笑った。

「そこで、だ。俺は思うわけだ……そのアリス王女さまを口説いた王子さんをつままえればいいんじゃないかねえか、とな」  
くいつと喉へ酒を流し込み、彼はつづける。

「アリス王女を見つければ、謝礼金がたんまりもらえるんだろう?　なら、王女さんに関わった人間をロナウドさまに献上すれば……」

「賞金がもらえるって、わけか?」

「ごくり、と男たちは喉を鳴らす。金があればあるほうがいい。酒も女も、やりたいことがし放題だ。」

指を立て、男は失われた国の王子の容貌を説明しはじめた。

+ + +

「あつちい!」

「バカ。冷ましてから食べなさいよ」



顔をしかめ、冷たい水をごくごく飲み、緑色の瞳をした男は唸る。対照的に、あつあつの湯気があがるスープにも構わず、赤毛の女は休むことなくそれを規則的に口へと運んでいる。

男はしばしふてくされたように顔をしかめたが、頬づえをついて彼女をながめているうちに、自然の頬が緩んでしまった。

「……なによ、気色悪い顔をして」

「うん、まあ、口さえひらかなきゃ、イイ女だな、と思って」

容赦ない女の言葉にも、彼はへラリと笑って応じる。それが気に食わなかったのか、女はフンと顔をそむけて食べることに集中した。彼はスープが冷めるのをじっと待つ。手持ち無沙汰な様子で、スプーンを揺らしながら、やはり目だけは彼女へと向けている。「カトリーナ」とつぶやけば、それが聞き取れないほど小さい声だったにも関わらず、彼女はちよつと眉をよせつつも「なによ」と応えてくれた。それがうれしくて、思わず破顔する。

「なあ、好きだ。だから、耳出してく」

「死ぬ」

言い終わる前に、彼は熱湯　彼が冷めるまで待つていたスープを浴びせられていた。

それでも、熱さでぼやける視界に入った彼女の頬が若干赤らんで見えたから、この制裁もあまんじて受けようと、そう思う彼はやはり、どこか頭のネジがはずれているのかもしれない。

「それにしても、俺様の邪魔をしてくれたあいつら……」

ふいに声を低めて、いつものへらりとした笑い方をディオオンが引っ込めたのは、翌日の朝のことだった。部屋は狭くきれいとは言い難いが、安い上に朝食付きという、旅人にはありがたい宿を出てからのことだ。

カトリーナは肩をすくめたが、それでも頷いて応じる。

「そうね。あなたの邪魔をしたのはどうでもいいことだけれど、」

彼女』を連れ去ったことには納得できないわ」

ディオオンが周りも見えずに悪党を蹴散らし、失踪中だという噂の姫君・アリス王女を手に入れるはずだったのだ。なんでも、今婚約者のロナウド王子が血眼で捜索中というではないか。

しかし、事は上手くいかなかった。途中でディオオン曰く邪魔者少女と見間違えるほど愛らしい顔をした少年と、冷たいがこれまた端正な顔立ちをした人物にアリス王女を取られてしまったのだ。

カトリーナは訝る。いまだ、ロナウド王子の元へ王女が戻されたという噂は聞かない。もし、謝礼金目当てならば、とつくに引き渡しているはずではないか。それに、彼らがアリス王女の身体目当てとは思えない。人売りにも見えなかった。では、いったいなにが目的なのか。そして、彼らはいったい何者なのか。

ディオオンは彼らの顔をはつきりとは見ていなかったようだ。彼の長所でもあり短所でもあるところは、目的以外を一切排除するところだろう。そして単純で実に惚れっぽい。彼はカトリーナが言うまで、男たちに言い寄られていた少女がアリス王女だとは知らなかったらしい。

正義感が強く、惚れやすく、単純で、まっすぐな馬鹿　そんな彼だからこそ、カトリーナは相棒に選んだのだ。

「あーあ。俺の賞金が！　俺の夢が！」

大げさにがっくりとうなだれる男。しかし、カトリーナはいつもの冷ややかなまなざしではなく、切なそうに目を細め、彼女にはめずらしい、やさしげな声音で「ディオオン」と彼の名を呼んだ。

そんな彼女に、彼は一瞬びっくりと目を見開くが、やがてバツが悪そうに頭をポリポリかいてから、ふいに柔く笑んだ。

「そんな顔するなよ。大丈夫。まだアリス王女は王子さんの手に渡ってないんだから。俺らがあの忌々しい邪魔者から横取りすりゃいいだろ？」

「そう、だけど……」

「なんだよ。心配してくれてるのか？ なんなら、今夜とか  
「行くよ」

「え？ ま、待てよ！ ちょっとは口説かせろ！ なんだったら  
「

「さつさと逝け」

「またまたあ。さつきのしおらしさはどうしたよ。俺のこと心配し  
てくれたんだろ？ だったらさ、今夜くらいおまえの柔らかい」  
「……死にたいの？」

氷点下のまなざしを男へ向ける。この男は口が減らない。油断も  
隙もあつたものではない。

そんな彼女にも構わず、というよりは挫けず、ディオンはからり  
と笑う。

「いいじゃねえか。だれがなんと言おうと、俺はおまえの、柔らか  
いあの耳が好きだぜ」

こげ茶色の瞳を大きくさせ、カトリーナは柄にもなくぼかんとし  
た。それにくつくつと笑うディオン。

緑の、深い緑のやさしげな色が深まる。どこまでも深く、深く、  
なにもものをも包み込んでくれるような、そんな瞳。

カトリーナは、思う。ああ、この男は知らないのだ。自分はこの  
瞳に救われたのだと。この笑顔に救われたのだと。

だから、そうだ。彼を信じてみよう。

だれがなんと言おうと、自分はいつか、誇りを持って彼の隣を堂  
々と歩くのだ。

「……行くわよ」

冷たい口調から元に戻ると、カトリーナはニヤニヤする男から顔  
をそむけて歩き出す。

そう、いつか。彼の隣を、本当の自分で歩きたい たとえ、で  
きそこないの獣人だとしても。



(6)

(6)

息が荒い。久しぶりに全力疾走をした。まったく自分の主は人使いもとい獣人使いが荒いと、エダはげんなりして思う。

「ちよ、もう、休もうよお！」

限界に声をあげれば、こちらは汗もかかずに振り向く彼女が、怪訝そうな顔をした。

どうして獣人の王たる者のくせに、そんなに体力がないんだ彼女の瞳が暗にそう言っているのを解し、エダはぶくりと頬を膨らませる。

僕は、アジエみたいに『力の枯渇』を考えないわけじゃないんだから……そう思うものの、少年はなんとか口から出かかると言葉を飲み込む。代わりに大きなため息とともに肩をすくめ、くいと顎で示す。

「彼女だって、疲れてる」

きっぱりとそう言えば、アジエは少年の示す先にいる、自分が半ば強引に手を引いて走らせていた少女に目をやった。彼女は今にも倒れそうなほどよるよるで、息も絶え絶えだ。

しまった、と口を動かさうなだれるアジエに、今度こそ、エダは盛大なため息をこぼすのだった。

ひとまず休もうという流れになった。アジエの先導で色街を抜け

て森のなかを走っていた彼らは、そのまま木の幹に身体を預けて腰を下ろす。

ひどく呼吸を乱していた『彼女』　アリス王女も、今は落ち着きを取り戻し、その瞳にわずかな戸惑いと不安をひめながらも、背筋をぴんと伸ばして座る様は可憐ながらも実に威厳があつた。

エダはふと、疑惑が確信に変わったのを悟る。

アリス王女は見ず知らずの人間に連れてこられたにも関わらず、逃げることはおろか取り乱す様子もない。むしろ、フードを脱いだ美青年のようなアジエをじっと見つめ、言葉を待っているようだ。

つまり、彼女たちは顔見知りらしい。

アジエは鋭いもとれる王女の視線を感じながらも、うろたえることはしない。だが、代わりに自身の指先を見つめ、なにかを考え込んでいるようだった。

エダはため息を飲み込む。たえられない。

もとより堅苦しい雰囲気は苦手なのだ。アジエがなにか話し出すまでしばし時間がかかるだろうと悟った彼は、それならばと愛くるしい笑顔を張り付け毅然とする王女に向かって口をひらいた。

「どーもどーも、はじめまして！　僕の名前はエダつていいます」  
手を差し出し握手を求めてみる。軽くウインクしたのはご愛敬だ。アリス王女は一瞬その丸い目をぱちぱちまたたかせたが、やがてどこか警戒の色を浮かべると、冷ややかに言った。

「あなた、そんなに簡単にわたくしに名前を教えていいの？」

きよとんとするエダ。わけがわからない。それに、せつかく笑顔を向けたのに。

少女はさらに冷たい声でつづける。

「わたくしはアリス王女よ。わたくしには力があるのよ。アリス王女には、名前を使って人を操る力があるのよ」

そんなことも知らないの、とあきらかに自分をこども扱いする彼女に、エダは心なしかぴくりと眉根が寄るのを感じた。

しかし、まだ堪えられる。

「へえ、そう」

「信じていないのね」

エダが肩をすくめて愛想もなく言うと、アリス王女はやや機嫌を損ねたらしい。

「わたくしには力があるの。絶対的な力が」

少女の瞳がランと光る。

「あなたなんて簡単に殺せちゃう。わたくしには力があるから。名前だって知ったんだから。みんなみんな、消えちゃえばいいのよ」

「

ぐつと結ばれた少女の唇。エダは堪えきれないとばかりに笑った。びっくりしたのだろう。急に笑い出した少年に、アリス王女は目を見開く。

「あーあ。本当におもしろいね。まあいいや。もうすこし君の茶番劇に付き合っただけ」

エダはくすりと笑む。そのまま琥珀色の瞳を妖しく光らせて少女の顔を見た。

「で、君の本当の名前は？」

「なにを」

「たしかに君は今、アリス王女らしいね。力もそれなりにあるみたいだし？」

クスクスと笑う少年。

「でもさ、知ってる？ アリス王女って、力を得る代わりになにか大事なものを失っちゃったんだって」

君はなにをなくしたの？

少年の笑みは艶やかだ。目を奪われるほどうつくしく、愛らしく、そして恐ろしい。

その恐ろしさはまるで芸術品のようだ。うつくしいなかに漂う不気味さ、神秘にひそむ触れてはならないその恐ろしいうつくしさ。

少女は思わず、生唾を飲み込んだ。

「別にね、言いたくないならいいんだよ？　たださ、僕、わかつちやったから」

にっこりと深くほほえむ彼はやはり愛らしい。  
それなのに。

「ねえ、力を奪って、その地位について、どんな気分なの……偽物のアリス王女？」

追っ手がかかるかもしれない。いや、かかるだろう。

そう思い、人目を引きたくなくて森へ逃げ込んだ。簡単には捕まるまいと、エダを信じて獣の群がると言われる道を走った。そしてそれは成功したらしい。

獣道を走って進んできたにも関わらず、一行は獰猛な野獣になど会わなかったのだから。

さすが、獣人のなかの王　孤獣。

エダの気配を感じてか、獣は隠れてしまったように出てはこない。そんな獣人であるエダも疲れはするらしい。彼に諭され、息も絶え絶えな『彼女』に気づいて休憩をとり、今は腰をおろしているところだ。

なにやらエダが得意の笑みで『彼女』に話しかけたらしい。先程まで痛いほど感じていた視線が外され、アジエはほっと息をつく。指先をくるくる回しながら、じっと見つめて考える。これから、どうしよう。なぜ、『彼女』は逃げ出したのか。

そうして思うのだ　ああ、もしかしてまた自分のせいなのか、と。

どうしたらいいのだろう。きつと今頃、『彼』はひどく心配しているのだろう。あれほど『彼』は『彼女』を愛していたのだから。せつかく幸せになれると思ったのに。それを願っていたのに。

なぜ逃げ出したのだ。なぜ『彼』から離れたのか。



ああ、自分はまちがったことをしてしまったのか。人を不幸にしてしまう、自分は。

とりあえず彼女の真意を聞かなければ。

「……エダ？」

ふいに顔をあげる。『彼女』に話を聞くためにそちらに顔を向けたアジエは、しばし硬直した。

「 なっ、なにをしているこの畜生！」

「 えっ？ は？ なに、アジエ、言葉遣い汚いよ？ 落ち着いて、ちよっと待とうよ！」

「 待てるか馬鹿者！ そこに直れ！」

アジエは目を見開き、怒りに顔を真っ赤にさせてわなわなと震える。そのまま勢いよく腰から剣を取り出し、悪党抹殺という雰囲気を含めて柄を握りしめた。

エダはあわてる。だが、アジエの怒りは収まらない。

それもそのはず、アジエが見たのは、愛らしい顔を妖艶に歪め、可憐な乙女にのしかかる少年の姿だったのだから。

一瞬言葉を失ったものの、我にかえった彼女はすぐさま立ち上がり怒鳴ったというわけである。

押し倒されていた少女は、エダがよけたにも関わらず身動きしない。それがさらにアジエの不安と怒りを煽った。

彼女の豹変ぶりに驚きあわてたエダは、しかし次第に腹が立ってきた。

気に食わない。自分以外に興味を示す彼女も、自分以外のために感情を剥き出しにする彼女も。

ずっと目を細め、少年は愛らしさを隠し、変わりにずっと大人びた、それでもやはりうつくしい顔でアジエを見やった。

「 落ち着け。俺は危害を加えてはいない」

いや、実際は危害を加える気は満々だったのだ。『彼女』はたしかに美人とされる部類の娘であったが、エダにはその容姿など魅力には感じられない。なにしろ、彼自身がだれも見とれるほどうつ

くしく、そして彼にとっては今日の前にいる、一見青年にも見える彼女こそが魅力的だと思える対象なのだから。

少年の冷めた表情と声に、幾分冷静さを取り戻したのだろう。アジエは肩に込めていた力を抜き、眉間に寄っていたしわをそのままに口をひらく。

「……では、なにを……？」

「言っとくけどさ、僕は今、おねーさんのモノなんだよ？」

その意味わかる？ と小首をこてんと傾けて問う少年は、先ほどの冷たい雰囲気など皆無だった。つまり、いつものエダだ。

問われた意味がまいちわからず、さらに眉間にしわを集める彼女に苦笑し、エダはそつと近寄ってアジエの眉間に触れた。

「……なにをしている」

「んー、しわを伸ばそうと思って」

ぐっ、ぐ、と軽く指に力を込めているエダは、そう言つとからりと笑う。あまりの邪気のなさに、アジエは毒気を抜かれてため息をついた。

やがて眉間のしわ伸ばしに満足したのか、ふいにエダの指が名残惜しそうに離れた。

「……悪かった。勘違いをした」

「ん、いいよ」

あながち勘違いでもないのだが。エダはそんな言葉を飲み込むと、いまだ寝転がって動かない少女へ目を向けた。

ブロンドの細くふんわりとした髪が、広がって垂れている。うつくしい。うつくしく、けれどエダには汚く残酷に見えた。その髪は蜘蛛の糸で、その中心にいる彼女は獲物を狙う醜いイキモノ……。狙われているのは、それこそ本当にきれいなコバルトブルーの瞳にダークグレーの髪を持つ中世的な雰囲気的女性。

はじめて『アリス王女』を見たとき、人形のようにだと思った。人形のように愛らしく、だれもが目を惹かれるのだろう。人間ならば、そして『アジエ』もまた人形のようにだ、とエダは思う。『アリス

王女』とはまたちがつた『人形』だけれども。

一方はだれからも愛でられるような、かわいいかわい残酷な人形。もう一方は、多くから恐れ疎まれるような、無表情で愛嬌のない、冷たい瞳の人形。

エダが好むのは、もちろん後者だ。そして、その『うつくしさ』は所詮、ただの人間には いや、ただのイキモノには理解できないのだろう。

ひとりほくそ笑むと、少年はちよこんと首を傾げてから、アリス王女の状態について説明するために、うつくしい彼女に向かって口をひらいた。

(7)

(7)

「彼女はね、自分の殻に閉じこもってしまっているんだよ」

ニコニコと、さも楽しそうに声を弾ませながら少年は言った。

「きつと己の醜さを知るのが怖くて仕方がなかったんだろうね」

クスクスと声をもらすエダに、アジエは眉間にシワを寄せた。

わからない。目の前の少年を信用していいのかわからない。けれどアジエには、彼を疑うということ事態がまちがっているのだと思えた。それがなぜなのかも、わからないが。

エダはんーっと唸り、やがてぱっちりとした眼をかすかに光らせた。

「あれ？ わかんないかなあ。おねーさんさ、まだ僕に嘘をつく気？」

なんだ、それは　そう問おうとひらいた口は、すぐに少年のそれでふさがれる。絡めとるように彼女の口内を蹂躪した少年は、妖艶な笑みを浮かべてやっとアジエを解放した。

いきなりのことに頭はついていかない。はじめてではない行為だったが、以前は生気を吸うためのものだった。しかし、今のそれはあきらかにちがう。言うなれば、恋人たちの交わすそのような、熱情的な、激しさと甘美さを備えていた。

思い至った途端、アジエは合点のいかない不思議な感覚に襲われる。怒りでも呆れでもない。恥ずかしいだとか、そういう感情の起伏ではない。ただ、彼女が抱くのは、違和感に似た、名前のつかないものだった。

それがわかったのだろうか。しばしアジエの変化をうかがうようにしていたエダであったが、口の端を引き上げる。琥珀色の瞳を軽く細めるものの、その顔に本当の笑みはなかった。

「……気に入らない」

につこりと口角をあげながらも、少年の目にはあきらかな嫉妬が燃えていた。

「僕以外で感情をあらわにするアジエが、すごく気に食わない。僕より特別なものがあるアジエがすごく気に食わない。僕のキスに戸惑わないアジエが、すごく気に入らない」

普段から饒舌である少年であったが、しかし。

まだ付き合いも浅いし、なにより彼は獣人だ。よくわからないものなのだ、とアジエは思い、さてどうしたものかと首を捻る。

倒れて動かないままのアリス王女も心配だし、これからのことも考えねばならないのに。とにかく、エダの機嫌をなおさなければと、アジエはようやく口をひらいた。

「……戸惑っては、いた」

「嘘」

考えて言った言葉だ。そう、自分は戸惑っていたはずだ。されどそれもあっさりとはエダには否定される。

「嘘ではない。驚いた。わけがわからなかった」

「でも、アジエは動揺しなかった。ちっともその気にならなかった」じつと、怖いほど真面目にこちらを見つめたまま少年は言う。

アジエはバツが悪そうに眉間にしわを寄せる。そんなことを言われたとて、仕方がないのだ。自分にはどうしようもないのだ。だって、わからないんだから。

しばし思案するように押し黙っている彼女を見つめていたが、少年は大げさにため息をつく、もういいよ、と肩をすくめた。

「おねーさんにはまだ無理かぁ。ま、いいや」

頭の後ろで腕を組むと、少年は「嫉妬も執着も久しぶりだしな」などとつぶやきながら、ニンマリと笑む。そしてやはり訝しげにす

るアジエには構わず、さつさと説明のつづきをしようと同じ直るのだった。

「アジエ、もう嘘はなしにしよう?」

少年の声は響く。彼の琥珀色に見つめられ、アジエは逃れられな  
いな、と感じた。

「ねえ 本当のアリス王女」

+ + +

時をすこしばかり遡ろう。

そのころ、人が歩くために造られた舗装された道を進んでいたはずの彼は、いつの間にか行く先々が伸び放題な草木で覆われているのにようやつと気づき、にわかに顔をしかめる。それでも無理やり進んでいくと、ついには自身の背丈にまで草が伸びていて道をふさいでいるものだから、彼の苛立ちを増すばかり。

「なんでっ、こんなにっ、歩きづらなんだっ!」

歯ぎしりしながらも、ぶんぶん腕を振って進もうとする。道は舗装されていたはずではないのか? なぜこんなにも歩きにくいのか……まるで獣道ではないか。

もともと怒りの沸点が低い彼は、とうとう先ほどから黙って後ろをついてくる彼女を振り返った。

「なあ、カトリーナ。俺たち、迷ったんじゃないのか?」

息も荒く言い放つ男に、カトリーナはちよつとだけ眉をひそめたが、すぐに口をひらく。

「驚くことに、迷ってはいないんだけれどね」

「じゃあ、なんでこんなに荒れているんだ。これじゃ、道なんて呼

べないじゃないか」

「そりゃあ、道じゃないもの」

ぽかんと口をあけ、ディオンは肩をすくめた彼女をまじまじと見つめる。

なんだ、それは。

「道をね、すすすーっと逸れていったのよ。まっすぐ歩けばいいだけだったのに」

指を立てて、つつ、と動かしながらカトリーナは言う。舗装された道を歩くだけ、そんなこともできないのか、と。

途端、ディオンはかっとなつた。それもそうだろう。彼女は彼が道を違えたにも関わらず、それを面白おかしくながめながらついてきたのだ。

だが、とカトリーナは口をひらく。

「本当にびっくりした。だって、道を逸れたのに、行きつく場所にちゃんと向かっているんだから」

馬鹿みたいに天才ね、と再度肩をすくめる彼女は、はたして、褒めているのだろうか、けなしているのだろうか……あきらかに後者だということは、言うまでもない。

ディオンはしばし眉根を寄せる。そうして不意に、なにか解したのか、ひとつため息をこぼして歩みを再開させた。

これは彼らにしかわからない変化なのだ。カトリーナがカリカリしていることも、その様子と理由に気づいたディオンの知らぬふりをしたことも、そしてその彼のやさしさをカトリーナ自身わかっていることも、だから先ほどまでとは幾分雰囲気がちがうということも。

カトリーナは歩きながら赤毛を結び直し、気合いを入れようと試みる。足手まといにはなりたくない。せめて、目の前をゆく相棒が、不必要だと思わなくらいにはなりたいのだ。捨てられたくはないのだ。

そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、ふいにディオンは足を

とめた。ハツとして、彼女も耳をそばだてる。

「西か？」

あきらかに先ほどまでとはちがい、表情に真剣な光が帯びていた。ディオンは間に頷くカトリーナに、先を促した。

「……西に五十歩、北に三十歩の位置……気配は 三人」

目をとじ、探るように、ひとつひとつ言葉を落としていくカトリーナ。辺りはしんと静まりかえり、鳥のささやきさえ聴こえはしない。そんななか、ディオンはさらに言葉を紡ぐ彼女をじっと見つめている。

「……ひとりは、意識がおぼろ……たぶん、獲物」

「厄介な『ヤツ』はいるか？」

カトリーナは目をあける。風がひとつ、ざわめいた。

「否、みんな人間」

一瞬見えた彼女の瞳は、その髪色と同じ、燃えるような赤だった。ディオンは表情を和らげ、彼女の細い手首をつかむ。

「行くぞ！」

ぐいと引つ張られ、驚きに見開くカトリーナ。けれどその口元は緩やかであった。



(7) (後書き)

ご愛読&お気に入り登録、誠にありがとうございます！  
不定期更新なのに読んでくださってくれる方がいて、もう感動して  
ます。

ありがとうございます！

読者さまもじわじわと増えていたり減っていたり、うれしいです(笑  
すこしでもお楽しみいただければな、と思います。

さて、なかなか進みません……申し訳ない！

獣人なのに獣人っぽくない！つまり、耳とか！笑  
もうすこししたら、ちゃんと出します頑張ります！

これからも時間潰しにでも目を通していただければ幸いです。

( 8 )

喉がからからだ、と感じたのは、彼が自分の目の前まで迫っていると気がついたときだった。

琥珀色の瞳をじっとこちらに向け、少年は触れるか触れないかのぎりぎりの距離を保っている。アジエは動けなくなつて、しばし、なにも考えることができぬまま、時が過ぎるのをやり過ごしていた。

「……な、なに……？」

ようやっと出た声は掠れていた。おもしろいくらい自分が揺らいでいるのがわかる。

エダはくいとアジエの顎に手をかけて、彼女のコバルトブルーの瞳をじいっと見つめる。

「そんなに動じちゃってさ。さつきとはえらいちがいだね」

クスクスと声をもらす少年。ささやかな怒りが瞳の奥にちらついている。

しかし、すぐにそれは拗ねた表情によつて押し隠された。

「僕をだれだと思っているの、おねーさん？」

手をアジエの頬にかけ、撫でる少年は年下とは思えないほど大人びた、高慢な表情をする。

彼のくるくる変わる表情や感情の起伏に、アジエはすこしばかり憧れを抱いたのかもしれない。胸の奥が、きゅっと音をたてた気がした。

そう、アジエには秘密があった。国中で、最強の力を誇ると謳われるアリス王女が、自分であったという秘密が。

それがいとたやすく、出会って数日しか経っていない少年にバ  
しるなどとだれが考えただろう？ 無論、バレルような行為はして  
いない……いや、したかもしれない。けれどあれは一度だけ。

アジエは頭に浮かんだ、はじめてエダと出会ったときのこと  
彼の囲われていた檻や拘束具を一瞬で破壊してしまったこと を  
忘却の彼方へと無理矢理押しやり、頭をふる。

あの行為を目の当たりにすれば、彼女がただの人間ではないこと  
くらい察しがつくというものだ。だが、相手はあの伝説とまで言わ  
れた孤独の獣王・孤獣なのだ。気にすることはないだろうと勝手に  
思い込み、完璧に油断してしまっていた。

苦虫を噛み潰したような表情で、アジエはおどけた少年に目をと  
める。

バレてしまつては仕方がない。

「……わたしを、どうにかするつもりか？」

慎重に、言葉を紡ぐ。エダは果たして、自分が『アリス王女』だ  
とすれば いや、もうすでに自分は『アリス王女』を辞めたのだ  
が なにかがかわるのか？

脅しだろうか。もしか、ロナウドに迷惑がかかるようなことは起  
きないだろうか。

しかし、そんな考えは杞憂に終わった。エダの一言によって。

「僕が知りたいのは、どうしてアジエが旅に出たのだったこと。そ  
れから、どうしてこの女の子が『アリス王女』の代わりになってい  
るのかっていうこと。それが知りたいな。あとはどうでもいいよ」

なるほど、孤獣が好奇心旺盛という噂は事実らしかった。

+ + +

「……まず、なにから話せばいいのか」

とりあえずと木の元へ腰をおろし、アジエは口を切った。傍らにはアリス王女　もとい、ラシルという名の少女が寝息を立てている。向かえに座ったエダは、そんな少女には目もくれず、ただコバルトブルーの瞳をじっと見つめていた。

「全部知りたい。アジエのことは、なんでも知りたい」

ああ、でも、と彼はつづける。

「とりあえず、僕が推測したことを話そうか？　そのほうが、アジエも説明がすくなくて便利でしょう？」

にっこりと笑う少年は、年相応に無邪気だ。それなのに、彼の笑顔にはどこか逆らえない、ただの子供とは思えない悠然とした雰囲気がある。

アジエは承諾の意味も込め頷いたが、ともにため息のようなものが出てしまったことは仕方がないであろう。

「じゃあ、言うね。まず、アリス王女は退屈でした」

「は？」

いきなり間抜けな声が出た。自信満々に語るエダは、「邪魔しないで」と彼女を諫め、つづける。

「退屈で退屈で仕方のなかったアリス王女は、ある日気づきました。このままでは、自分の意見もなにもないままにロナウド王子と結婚になる、と」

ロナウド、とエダの口からその名が出たとき、アジエの身体が一瞬こわばった。エダは無視して再度口をひらく。

「そんなとき、ひとりの女の子がいました。彼女はアリス王女のお付きの侍女でした。侍女は、秘かに思っていたのです　自分のほうがうつくしいと、ロナウド王子に寵愛されるべきだと」

物語を語るような口調でつづけるエダの目は、どこか冷やややかだ。笑っているのに、目がすわっている。

アジエはなぜだかわからぬまま、彼の話を聞いていた。

「アリス王女は名案だと思います。だから、『力』の一部を侍女に与え、アリス王女とさせたのです。自分は晴れて自由の身を手に入れました、とさ」

めでたし、めでたし、と語るエダ。しかし、唐突にアジエは気づいた。ああ、この男はすべて知っているのだと。

いや、それには語弊があるかもしれない。知っているというより、気づいたのだ。悟ったのだ。

わざとらしい推測を連ね、アジエに否定させる。どこまでも、嘘はつけぬだろう。

「わかった。話そう」

いったん目をとじ、アジエは応じた。嘘をついてごまかす気は、なかった。

エダが推測だと言って語った内容は、根本的には当たっているのかもしれない。結局ラシルは王子の寵愛を受けたかったわけだし、アジエも自由を手に入れたのだ。

ただちがうとすれば、アジエには『退屈だ』という概念がなかったことだ。それに、ロナウドとの結婚に不満はなかったし、自分がだれとどうなるうが構わなかった。

アリス王女。そう呼ばれて生きてきた。物心ついたときには、すでに母や父という存在はいなかったように思う。ただ、王女、王女と周囲から言われ、ぼんやりと生きてきたように思う。心には、なにもなかった。

たったひとつ、響いた言葉をのぞいては。

「わたしが、旅に出ようと思ったのは……ある事件がキツカケだ  
た」

アジエは語り出す。遠い過去のようない出を、頭の引き出しか  
ら探った。

「きっかけ？」

「そう。けれど、もうずっと幼いころから気づいていたんだけど

」

そこでアジエは言葉を切る。物思いに耽ったわけではない。ぴり  
ぴりと肌を刺す気配を感じたからだ。

エダはもつと前より気づいていたのだろう。驚きもあせりもなく、  
飄々としている。

そして、声があがった。

「ハイハイ、ストープっ」

ひらひらと手を振りながら木陰から現れたのは、茶色っぽい黒髪  
の男だ。にこやかな笑みを絶やさず浮かべて口をひらく。

「お取り込み中に悪いんだけど、さっさと獲物ちゃんを渡してもら  
うぜ」

言うなり、男はいきなり笑みを柔らかいものから鋭いものに変え、  
スルリと腰の剣を引き抜いた。

アジエは警戒しながら構える。『獲物』とは、どうやらラシルの  
ことらしい。今は彼女が『アリス王女』だ。彼女を狙うなら、男ひ  
とりで襲うはずはないだろう。警戒の色を強めたアジエであったが、  
エダはニタリと場違いな笑みを浮かべた。

「いいねえ。今日はとっても面白くなりそう……半獣人なんて、め  
っずらしい〜」

歌うような少年の声は、その場によく響いた。

瞬間、剣を構え余裕そうにしていた男の顔がさっと青ざめる。と  
同時に、叢からもうひとつの影がうごめいた。

エダはニヤリと口角をあげると、舌舐めずりをして目を細める。

「本当、アジエのそばは退屈しないでいいよ」



(9)

(9)

エダの目は爛々と輝いていた。獰猛な、野獣のような、まなざし  
で。

今、彼には少年の愛らしい様子は影を潜め、ただ獲物に喰らいつく猛獣が暴れていた。いや、たしかに彼の姿は通常の少年の姿。それなのに、その動きは人間のものとは思えぬほど素早く、かつ人を傷つけることに躊躇いもなにもないのだ。

なんて奴 傷つける行為すらうつくしく舞っているようだ、と場違いに見惚れたアジエに、そのとき衝撃が走る。

「余所見とはいいいご身分だなあ、オイ！」

「くっ」

ぐぐ、と思い一撃をなんとか小刀で押し返す。しかし相手は剣。刃こぼれした小さなナイフはもはや使い物にならない。これで見つめだ。

「もうちよつと頑張れよ、相棒オ！」

さらに滑らすように武器を流し、男はアジエの刃物を弾き飛ばした。

草むらから出てきたのは一組の男女だった。アジエはアリス王女に危害が加えられないよう臨戦態勢に入ったが、エダはくすくすとおもしろそうに笑うばかり。そうしてなにか一言放つと 途端、その場は戦場と化した。

男はアジエに、女はエダへと襲いかかったのだ。



アジエは気が気ではなかった。表情にこそ出さなかったが、内心冷や冷やしたと同時に、高揚もした。

エダの 孤獣の戦闘が見れる。

彼女の期待通り、エダの姿はうつくしかった。残虐だった。武器もなく、相手に傷を負わせる。目にも止まらぬはやさで、遊ぶように相手をする。ああ、なんて時限違い。

だが、アジエもそこまででやっとだ。彼女の相手の男は強いのだ。腕がいい。素人ではないのは傍目にもあきらかで、気を抜けば一気に意識ごともっていかれそうであった。

(やはり……力が……)

女の細腕、とはよく言うものだ。そこらへんの男に負ける気はしなかったが、今日の前にいる彼はちがう。剣の筋からいっても、どこかで戦闘を経験しているらしい。きれいな型だ。それでいて、野性的。独特の動きが入って、読みとりにくい。

戦闘、というよりは、喧嘩といったほうがいいかもしれない。

ふいに、目があった その瞬間、気づく。

(やられる …！)

ぱしりとエモノがはじかれ、武器をなくしたアジエにふりかかる、刃。スローモーションで流れてくる、自分への攻撃。

柄にもなく目を見開き、しかし、無意識にアジエは“使おう”と  
した。

だが。

「ストップ！」

やけに明るい声とともにアジエは白く細い腕に絡めとられ、同時に危機を脱していた。

(え?)

アジエは、少年の腕のなかにいた。そして少年は、軽々と飛び上がり、木の上に身を寄せている。

あまりの衝撃に鈍い頭で、彼女はやっと言葉を探し出す。

「エダ……?」

いつの間に、こんな近くに移動したのだろう。そしてどんなすばやさでアジエを救出し、抱きすくめていているのだろう。

その驚きは、敵方も同じだったようだ。仰天に動きを止めた先ほどまで戦っていた男は、間抜けなほど邪気のない表情をしてこちらをまじまじと見ていた。

「なっ、なんだテメエ！ 何者だっ」

やっと我にかえったのか、途端に騒ぎ出す始末。エダと戦闘していた女性は、傷を負ったのか、肩を庇い、足を引きずって木の下までやってきた。

「……こいつ、ただの人間じゃない」

苦々しげに言葉を発し、女は地面に膝をつく。あわててと呼ばれた男が駆け寄り、彼女に肩を貸した。

「人間じゃないって……でも、二オイは人間だったんだろ」

「二オイなんて、高等な獣人は隠せるんだよ」

あえぎ、女はエダをにらみつけて言った。

「完全なヒトガタになれるなんて……ただの獣人じゃない！」

彼女の声は震え、恐怖が混じっていた。エダは敏感にそれを察知すると、妖艶ともとれる、子供には似つかわしくない笑みを口元に浮かべた。

「そうだね。ただの獣人じゃないよ？ アンタもでしょ」

目を細め首を傾けるしぐさは実に愛らしい。されど、その唇から紡がれる言葉は毒をおび、痛烈に響き渡った。

「そうでしょ？ 半獣人のデキソコナイ」

アジエはただ、場面が流れていくのを見ているしかなかった。自分だけが置いてけぼりをくらってしまったようだ。

たしかにエダは見た目とはちがいたただの子供でもただの獣人でもない。王と謳われし、孤高の獣 孤獣なのだから。

だが……また相手もただの人物ではなかったらしい。半獣人

それは、どういうものなのか。

アジエははじめて聞く言葉に、すこし興味をもった。

「……くうっ」

「カトリーナ！」

呻き、がくりと倒れる彼女を、男はさつと腕を伸ばして受け止める。カトリーナと呼ばれた彼女は、悔しそうにさらに眉間にしわを寄せた。

「ディオーン……ご、めん」

役に立てなくて。

ぼつりと、ほとんどつぶやくように発した彼女の声は、男の拳に力を与えるには充分だった。

男　ディオンは彼女を木の下へやさしく寝かせ、立ち上がる。

にらむように、ふたりに対峙した。

「おまえらがただの『邪魔者』じゃないってことはよくわかった」

ディオンは剣を持つ腕に力を込める。

「だけど、俺には譲れないもんがあるんだ。『獲物』は渡してもら  
うぜ」

真剣なまなざしを受け、アジエもまっすぐにそれに応えるべく声をあげようとしたりした。絶対に渡すことはできない、彼の愛するラシルを傷つけることなどさせない、と。

けれどそれを声にして発するまえに、自分を抱き抱える少年によって遮られてしまった。

「どうして？ どうしてそこまで力を望むの？」

エダはわざとらしく首を傾げる。

「アンタたちは　いや、アンタは賞金目当てじゃないよね……？」  
くすりと含み笑い、少年は敵意剥き出しの男に問いかけた。それから、荒い息を繰り返す女を指差す。

「このヒトを助けたいから、『アリス王女』を、その力を望んでい  
るんでしょっ？」

「そ、それは……」

「……ディオーン……？」

エダの言葉に見るからに動揺するディオーン。そんな彼に、先程より状態の悪化しているカトリーナがかすれた声で尋ねた。

「ど、どういう、こと……まさか、あたしのため……？」

正面から、ほとんどずがるように彼女に見つめられ、ディオーンに逃げ場はない。うるたえ、口のなかでもごもご言葉を探っているようだ。うまい答えは出てこない。

「いや、俺は……」

「でもそれは無理だよ」

おろおろしている男を、琥珀色の瞳が嘲笑った。

「だって、アリス王女の本当の力は、僕のモノだから」

ニタリ、とやはりこどもに似つかわしくない笑みを浮かべて。淡々と、エダはつづける。

「アンタは、『アリス王女』の絶対的な力を使って、そのデキソコナイを獣人が人間かにしようとしたんでしょ？ アリス王女の起源は、獣人にあるもんね」

「エダ……それはどういうことだ？」

彼の言葉に、それまで黙っておとなしくしていたアジエが顔をしかめた。はじめて聞くことだ。この孤獣は、いったいなにを知っているというのだろうか？

エダは純粹に疑問を投げかけるコバルトブルーの瞳を、すこしだけ呆れの入ったような、それでも愉快そうなまなざしで見やる。それから、ようやく口を切った。

「ニンゲンたちには隠されているけれどね、アリス王女の力は、獣人の血をたくさん飲ませることで現れるんだよ」

獣人の力を封じる、獣人殺し。さりとして、それは万能ではない。能力の卓越した孤獣などは、簡単にそれを破ることもすらできるのだ。

だから、ニンゲンの頂点たる王は考えたのだ。なれば、その力に匹敵する存在を手に入れよう、と。

ひとりの人間の少女が選ばれ、赤子のときからみつつになるまで、毎日毎日、獣人の血をすすわされる。拒絶反応で死ぬ人間もすくなくないが、生まれたての赤子のなかにはそれを受け入れる者もいるのだ。赤子は、ニンゲンに必要な『なにか』を失う代わりに、獣人に匹敵する力を得る。

それは王の切り札であり、周りの恐れになる。ゆえに、『アリス王女』は延々とつづいてきた伝統だったのだ。

初代の、この力を手に入れたのがアリス。よって、力を受け継ぐ者の名を、今も同じく語っているというわけだ。

選ばれた『アリス王女』の末路は様々だ。王の妾になる者も、一生日陰の身として生きる者も、いる。ただ、彼女たちの力は一代のみ。決して『ニンゲン』との間に子どもを孕むことはなかった。

創られた『アリス王女』。そこには、たくさんの獣人の命が費やされる。この秘密は、方法とともにだれにも語られはしない。王家の秘密だったのだから。

これが真実だよ、と少年は愛くるしい笑顔で締めくくった。

周囲は、みな、一様に呆然とする。

ディオンはカトリーナの視線から逃れるように。カトリーナはどこか思いつめるように。そしてアジエは、知ることのなかった真実に慄き、次いで、かつて言われた『彼』からの本当の言葉の意味を悟った。

君は、まだ本当に笑えていないんだ。だから、いつか、その笑顔を見せてほしい。

もう、『アリス王女』は君で最後にしよう。

アジエ、君は、僕にとって大切な人に変わりはないんだから。

妹のように、かわいがってくれた。友人のように、親しみを込めて接してくれた。そんな、彼の言葉は、ニンゲンらしくないアジエの心のなかで、ずっと輝くように残っているのだ。ありえない、ことなのに。

「……わたしは……だから、力を分けたんだ」

ぼつり、とつぶやくように言葉を落とす。先ほど、エダに迫られ、話そうとした過去のことを。旅に出た、キツカケを。

「あの人が　ロナウドが、ラシルを好いているのを知っていたから。わたしを大切だと言ってくれたあの人に、幸せになってほしかったから……『アリス王女』に力が必要なら、わたしの血を飲ませて力をすこしでも分ければ、それでいいと……」

このままでは、ロナウドが自分と結婚してしまう。そうすれば、ラシルは彼をあきらめるしかない。

事件は、単純だった。嫉妬し、我を失ったラシルがアジエの寝室へもぐりこみ、殺したあとで自分も死のうとしたのだ。

その場を見つけたのは、ロナウドだ。彼は、彼に似つかわしくな  
いままざしで、ふたりの少女を　無表情で首を傾げるアジエと、  
涙を散らしながら嗚咽するラシルを　交互に見やる　そのとき、  
気づいたのだ。はつきりと。

彼は、ラシルを愛している。アジエのことは好きでも、その感情の種類がちがう。

だから決めたのだ。なれば、自分はここにいないほうがいいと。  
アジエは自身の血の入った小瓶を渡し、ラシルへと飲ませた。そして自分は髪を短く切り、引きとめるロナウドを振りきり城を後にしたのだ。

幸い、アリス王女の姿は国民には知られていなかった。だから、  
だれがアリス王女のなろうと、構わなかったのだ。

「わたしは、構わなかった。ふたりが幸せなら……旅に出る目的も

できたから」

わたしも、泣いてみたいんだ。

「エダ……わたしは、なにか間違っていたのか？ ロナウドに、迷惑をかけてしまったのだろうか……？」

彼女らしくもない、弱気さだ。エダはむず痒い気がして、すこしだけ肩をすくめた。

「さあ？ それは、本人に聞いてみましょうよ」

すたり、と一気に木の下へと降り立つ。カトリーナも気づいたようだ。いきなり目を見開き、きよるきよると辺りを見回す。

「ディオーン！ 東から足音がする！」

「なにっ」

「はやく逃げた方がいいよ？」

鋭いまなざしになったディオーンに、エダは相変わらずの笑みを浮かべた。

「その足音のなかに、ハンター狩人もいるからさ。半獣人なんてめずらしいの、捕まっちゃうよ」

アジエを地へ下ろし、少年はぐんと伸びをする。漆黒の髪を気だるげにかきあげた。

「僕は隠そうと思えば隠せるけど。アジエもいるし。でも、アンタらはさっさと逃げた方がいいと思うよ。それに デキソコナイは、僕のそばにいとつらいんだ」

力に、あてられるからね。

にっこりと目を細めた少年。その背後から、禍々しいオーラがあふれているような気がする。

ディオーンは、顔をしかめた。それから、一気に怒りがこみ上げる。道理で、先ほどからカトリーナの容体が悪くなるわけだ。たいした出血をしているわけでもないのに、もう肩で息をしている。

「なんだよそれ。はやく言えよ！」

「あのときの仕返しだよ」

「はあ？」

「いいから。はやく行っちゃえ」

ベーンと舌を出して、エダは最後にケラケラと笑ってやった。

仕返し、とは 『アリス王女』もとい、ラシル強奪の際に、麗しく颯爽と助け出すという登場シーンを邪魔されたことの仕返しに他ならないのだが。

ディオンは口のなかで「クソガキ」と悪態をついたが、それ以上構ってられないと判断したのだろう。荒い息のカトリーナを背負い、「覚えてろよ」などとどこぞの悪役のような捨て台詞を吐いてさっさとその場を後にした。

「……エダ、おまえ……」

「さーて。ここからは、おねーさんの出番だよ？」

さすがに、アジエでもわかる。近づく足音。それから。

彼の、気配が。



( 10 )

( 10 )

大勢の足音が聞こえ、気配がする。アジエはその場に硬直し、しばらく無言を貫いた。

頭のなかではめまぐるしく思考が消えては浮かびを繰り返している一方、まったく言っていないほどなにも考えられない。

どうする。彼と会うのか？ どの面さげて、会えるというのだ。

今の状態はどうだ。ラシルは気を失い、小さなこども エダと自分だけ。言い訳はできるか？ 彼だけならまだしも、ハンターを含めた大人数がいるというのに。

ハンター、という単語が頭に引っかかり、アジエはハツとして顔をあげる。どうにか鈍った頭をフル回転させ、浮んだ心配事を少年に突き付けた。

「エダ！ ハンターがいるって……」

おまえは逃げなくていいのか、という問いは、彼のあきれるほど清々しい笑顔の前に消え去った。孤高の獣人の王を心配するなど、ばからしいということか。

けれど、エダは顔を見られているはず。王さま殺しとして手配されていてもおかしくはない。ロナウドとて、父を殺されたのならば恨みもあるかもしれない。

ニンゲンとは『そういうもの』だろうと、アジエは思い至った。

やはり、彼と せめて、彼だけは逃がすべきだろう。

「エダ……？」

急いた気持ちを押しとどめ呼びかける。思いの外近くにあった端

正な顔が、ゆつくりと笑みを深めた。

「大丈夫、なんの心配もいらぬよ。アジエはただ、覚悟だけしておいてね」

契約したこと、忘れちゃだめだよ　ささやくように声を落とし、少年は足音の方へと顔を向ける。アジエも自然とそちらへ顔を向けた。

そうこうしているうちに、時間切れになってしまったらしい。すぐそこまで気配はやってきた。

覚悟、とはなんだろう。彼に会う覚悟なら、たった今できた。

ガサリと音をたてて、とうとう『彼』が現れた。

なつかしい、という思いに一気に支配される。胸の奥をなにかが駆け巡った気がして、アジエはあわてて奥歯を噛みしめた。

「ア、ジエ……？」

彼のかすれた声があった。ロナウドは色の瞳を見開き、しばし硬直する。

アジエはすこしだけ苦笑を浮かべ、さつとその場にひざまずいた。

「お久しぶりです、殿下」

思ったよりも動揺せずと言えた。自身を奮い立たせ、アジエは思い切って顔をあげる。

見目麗しい、ひとりの青年がそこにいた。青い瞳は宝石のように汚れがなく、やや儂げな顔立ちが彼の物腰の柔らかさを引き立てる。茶色の髪をひとつに緩く結っており、上品な深緑の衣を身に纏って立つ姿は、一級品の貴族そのものだ。

ちくり、と痛む胸を無視して、アジエはわざとほほえみらしいものを浮かべた。

「あ……アジエ！　本当に君なのか？」

半ば呆然としていたロナウド王子だったが、ハッと我にかえると興奮気味に声をもらす。そこには喜色以外のなものもなく、本当

に純粹にアジエとの再会をよろこんでいるのが手に取るようにわかった。

アジエも普段は動かない表情の筋肉がかすかに動いたのを感じた。今、自分はうれしいのだと他人事のように思う。

大勢の足音がしたのに、現れたのはロナウド王子ひとり。エダはそつと気配を消して身を隠している。

ふ、と息をはく。向き合う覚悟を決めて。

ロナウドを見つめたまま、アジエは眠るラシルの顔を見えるよう引き寄せた。

次の瞬間、がらりとロナウドの表情が変わった。彼の視線の先を追えば、横たわる少女の姿。

「ラシルっ！」

すぐさま駆け寄りロナウドは少女の肩を抱き寄せる。

「大丈夫です。気を失っているだけですから」

アジエも隣へ腰を下ろしとりあえず状況の説明をする。ディオンのヤトリリーナたちとの戦闘のことは省いて、ただ偶然見つけたラシルを保護したということにした。それから逆に、どうして彼女が城を抜け出したのかを尋ねる。

「アジエ……君がラシルを見つけてくれたんだね？　ありがとう」

「いえ……わたしは、なにも」

ロナウドは質問には答えず、思いつめたように眉根を寄せ、それでもラシルの無事に安堵の息をこぼした。礼を言われたが、中途半端にアリス王女の力を与えてしまったことでラシルは不安定になったのだ。むしろこちらが謝らなければなるまい、とアジエは奥歯を噛む。

それに王様のこともある。いつまでも黙ってはいられない。

「殿下、あの……」

「アジエ、父が死んだんだ」

アジエが口をひらくのとほぼ同時にぼそりとロナウドが言った。

「臣下の話では獣人を捕まえ奴隷にしようとしたらしい……ばかな

ことを」

アジエは目を見張る。ロナウドの青い瞳には怒りや悲しみよりも哀れみがありありと浮かんでいたのだ。

「殿下は……その獣人を恨んではいけないのですか」

「恨む？ なぜ」

半ば自嘲的にロナウドは吐き捨てる。

「父は狂ってた。力ばかりを求め、ラシルを苦しめようとしていたし、君にだって酷を強いていただろう？」

今度は悔恨の色が浮かんだ瞳でロナウドに見つめられ、アジエはたじろぐ。助けてあげられなくてごめん、と悲痛につぶやく彼に、こちらが申し訳なくなるくらいだ。

「わたしは、殿下がそばにいてくれたから苦しいことはありませんでした。だから気にしないでください」

もとより感情の起伏のすくない自分だ。ロナウドが気にすることなどなにもない。

「今度は彼女のそばにいて、幸せになってください」

ラシルを見やってそう言えば、彼女を抱くロナウドの腕に力がこもった。

「もう城には戻りたくないのか……？」

青いきれいな瞳がまっすぐにこちらを見た。一瞬だけ揺さぶられたような気がする。

「だけど。」

「おねーさんは僕と一緒にくるのー」

口をあけたちようどそのとき、見計らったかのように間の抜けた声が出た。エダだ。

今まで木々の一部のように気配を消していたから、唐突に現れたように見えただろう。ロナウドはぎよっと目を見開いている。

「君は……？」

「彼はわたしとともに旅をしている者です」

今度はアジエが口をひらく。どうやら王を殺した獣人の顔をロナ

ウドは知らないらしい。なにか考えるよりも先に、アジエの口は勝手に動いていた。

「そうそう。僕らふたりで仲良く旅をつづけたいの。だからあ、アソタは邪魔しないでよねー」

ソソとして言う少年に、ロナウドは苦笑を浮かべ、「わかったよ」と承諾した。あからさまなことも扱いに、エダがむっとして頬を膨らませた、そのとき。

ふいに身震いして、ラシルが目を覚ました。

瞬間、悲鳴をあげる。

「い、いやあー!」

突然のことで、ロナウドもアジエも目を見開いて固まるが、エダはちがった。すっと泣き叫ぶ少女の額に手をかざしたかと思うと、につこりとほほえむ。

「大丈夫。ほら、目の前を見てごらん？ 君を害する人じゃないでしょ」

声はひどくやさしい。誘われるまま、ラシルは悲鳴を呑み込み、そっと辺りを見回す。

「どうして城を抜け出したの？」

ぼんやりとしたラシルの瞳から、ぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。まるで術にかかったかのように、彼女はしゃべり出す。

「あ、謝りたかった……わ、わたくしが……わたしが、幸せを奪ったから……」

「幸せを奪ったの？」

穏やかなやさしい声のままエダは問う。こくり、とラシルの首が縦に振られた。

「醜い、嫉妬だった……そんなに高貴な身分じゃないわたしが……本物のアリス王女に、敵うはずないもの」

語られるラシルの声は素直で、アジエもロナウドも微動だにせず耳を傾ける。

「で、も、あきらめられなかった……だって、本当に愛しているん

だもの……！ 失いたくない！」

唐突に、少女の瞳にめらりと炎が宿る。ブロンドの髪を振りまわし、激しく声を荒らげた。

「彼女がいる限り、わたしは彼女の代わりでしかない！ 羨ましい……彼の隣にすることが当然だという証が欲しい……だれにも渡したくないの！」

だけど、とラシルは再び静かな声音で話し出す。

「力は、いいものではなかったわ……『アリス王女』になっただって、結局わたしは『わたし』でしかなかった。だから謝りたかったの。居場所を奪ったわたしを、許してくれるなら」

ぼろぼろ、ぼろぼろ、涙を流す少女に、アジエは言葉を失った。たぶん、勘違いでないなら、彼女はアジエに謝るために城を抜け出してきたのだ。そして今なお、ロナウドを想うあまり嫉妬に苦しんでいる。

結局、彼女に力を与えて自己満足していただけなのだ。

ラシルの腕をとり、アジエは彼女と視線をあわせた。おぼろげに揺れていたラシルの瞳が、徐々に定まりコバルトブルーの瞳をとらえ、見開かれる。

「ラシル、すまない。わたしはあなたを苦しめた」

「ア、アリス王女……さま……」

いいや、と首を振る。

「わたしはもうアリス王女を辞めるんだ。けれど、あなたもアリス王女であるうとする必要はなかったんだ」

ぐ、と握る腕に力を込める。

「あなたは謝る必要がないよ。結果的にわたしは自由を手にし、今幸せなんだから。たぶん、城で過ごすよりずっと快適に生きているよ」

普段のアジエには見られぬほど柔らかい表情で語る。伝えたかったから。

「ロナウド殿下はあなたを愛しているよ。彼はあなたが『アリス王

女』であるうとなかろうと、愛しているよ」

「そんな……嘘よ」

「嘘じゃないよ」

力強い声で、今度はロナウドが口をひらいた。アジエと視線をあわせて頷くと、そつとラシルの手を握る。

「僕の心を乱すのも、よろこばせるのも、君だけだ。ずっとそばにいてほしいんだ……ラシル」

青い瞳がまっすぐに少女へ向けられた。

彼の言葉が本物であると、アジエにはわかっていた。

いつも穏やかでやさしいロナウド。けれど、ラシルのことを話すときは顔がこれでもかとはかりにほころぶし、声には隠せない明るい色が浮かぶ。彼女を見つめる瞳は、いつにも増してきらきらとしているのだ。そして同時に、その青い瞳に揺らめく情熱的な感情も、うらやましいほどはつきりしている。

アジエは目を細めた。たぶん、今まででいちばん『人間らしい表情』をしていることだろう。

そつと、そつと足を後退させる。静かに、気配を消して、ふたりから離れる。

くるりと踵をかえす。隣でエダがくすりと笑うのを感じた。

+ + +

その後、抱きしめ合うふたりの男女を捜索隊が発見し、めでたく城へと帰還した。

ロナウドが王位を継ぎ、ラシルという少女とめでたく結ばれるの

は近い未来の話。ロナウド新国王の発表で『アリス王女』は守り神という形で存在し、神殿を建ててまつられるようになるのも、そう遠くない未来の話。

夕暮れ、少年が琥珀色の瞳を細めて言った言葉を、アジエは感慨深げに思い返す。

「おねーさんの初恋はさ、ロナウド王子だったんだね」

そうか、と納得した。あれは恋だったのか、と。

そして、ヒトのように恋をできた自分に驚き、すこしだけうれしくなったのは秘密だ。

「じゃ、行こっか」

にっこりと笑みを浮かべて手を差し出す少年。きよとんと首を傾げたアジエの手を、彼は仕方ないなと肩をすくめて強引に握った。

「それでさ、アジエ？」

「なんだ」

エダは、コバルトブルーの瞳を心行くまでながめてから口をひらいた。

「本当の名前は、なんてゆうの？」

一瞬言葉をつまらせたが、すぐにアジエは答えた。彼になら、教えたいと思ったから。

「アンジェイーリア」

道行くふたつの影が伸びていく。行き先は未定。それでも、ふたりの道ははじまったばかりだ。





(1)

## 仮面と魔法

(1)

床一面がぴかぴかに磨かれた大理石。まるで鏡かなにかのように、その上を歩く男の姿を映している。コツコツと規則的な音をたてて彼は歩みを進めていく。

周りに明かりはない。大理石が時々きらつきらつと反射する以外は、ほぼ暗闇に近かった。それなのに、男は迷うことなく進んでいく。

ふいに、本当にふいに、という様子で彼は立ち止まった。しばし押し黙り、じつと動きをやめる。

もしだれかがこんな男の様子を見れば、時間が止まってしまったのかと疑うかもしれない。それほどまでに、男はぴくりとも動かなかった。

「何の用だ 裏切り者め」

唐突に声が響いた。大理石の床が反響するように、その声を微動だにしなかった男へと届ける。

声は再度言った 裏切り者、と。

するとどうだろう。突如男はニヤリと口角をあげ、まっすぐに声のほうを向いた。

「その面を引き裂いてやりたいものだな」

姿なき声はいまだに憎々しげに、怒りに震えていた。

けれど男は反してケタケタと声をたてて目を細める。

「上出来サア……俺あ、随分とイイ働きをしたんだからよ」

男がそう言くと、声は幾分和らいだ。

「ほう、それで？」

「そう焦るなよ。奴は『華碧い』でしばらく過ごすそうだけ」

催促する声に、男はケラケラ笑いながら教えてやる。声はしばらく吟味していたが、やがて満足そうに言った。

「いいだろう。では引きつづき、この仕事はおまえにくれてやる」

「了解！」

ケケケ、と笑ったかと思うと、男は身を翻す。

「もうすぐ……もうすぐ、自由だ」

ぼそりとつぶやく声は、愉快そうに響く。

「待ってるよ仮面のご主人さま。俺が奴をとっ捕まえてきてやるからな」

仮面のご主人さま、と呼ばれた声は満悦して笑った。

「期待しているぞ、カラス」

+ + +

「お腹すいたあーっ！」

バン、と元気よく扉をあけて店へ入るなり、少年はカウンターの店主に笑顔を向けて手を挙げる。

「ハイ、僕パスタがいい！」

それからおいしい干し肉と果物と酒を少々……なんて注文し出す少年の頭を、アジエは遠慮なく叩いた。

「すまない、マスター。酒はいいからあたたかい食事を頼む」  
突拍子もない客の連れは常識人らしい、と判断した店主は、気前のいい笑顔で了承した。といっても、こどものくせに一人前に酒を頼むだなんてかわいいものだ、と思っただけでスルーしていたのだが。  
出てきたつまさうな食事に舌鼓を打ちつつ、ふたりはこれからのことについて話し合った。

旅をつづけて数日経つが、エダはとても気まぐれで行動するイキモノだということがわかった。もともと獣人とはそういうものなのかもしれないが、目的もなくぶらりと村へよったり野宿してみようと言ったり、突拍子もない行動をとることが常だ。

それでも彼の行動はアジエにとって真新しい発見ばかりで、いい経験になっている。

アジエは、目的があつて旅をしているつもりだ。はじめはただ口ナウドとラシルの幸せのため、『アリス女王』という自分の存在から抜け出すために城を出たのだが、今ではきちんとした目的がある。それこそ、はじめてエダと出会ったときについ口走ってしまったホシイモノ　悲しみ。

悲しみを手に入れる願いを叶えてやる、という誘いによって獣人であるエダと契約したが、アジエはいまいちその真意をつかめずにいる。

『契約』とはなにか、そして本当にエダは『カナシミ』をくれるのか……？

むしろ、悲しみとは無縁の存在であるようなエダだ。契約をしたといつても、特に変わったことはない。力を与えるため生気を吸われたのはじめの一度きりで、それ以来とりわけなにか代償を払った覚えもない。

それとなく尋ねてみても、少年は話題を変えて「まあいいじゃん」と言うだけだ。アジエは気にすることをやめ、成り行きに任せてみることにしたというわけである。

「ん〜、アジエはどこか行きたいところでもあるの」

ペロりと紫の果実を平らげながらエダが問う。すでにおかわりを三回している。

「そうだな……ハビヤの村にいつてみたい」

ハビヤの村はスワズレット国の最北に位置している、貧しい村だ。今まで城のなかから出たことのなかったアジエは、とりあえず自分の暮らす国をめぐるうと決めていた。

「どうしてまた、ハビヤなんか」

「噂を聞いたんだ。最近、盗賊が出ていると……」

アジエの言葉にエダも顔をしかめる。

貧しいはずのハビヤに盗賊が出るなんておかしい話だ。盗る物などないだろうに。

「もしかすれば村を根城にするのかもしれない。そうなればきっと、民は苦しむだろう」

エダに言わせれば、そんなの知ったこっちゃない。されど、アジエの考えが手に取るようにわかったのか、ため息まじりに承諾した。「わーかったよ。じゃあ、しばらくこの村で羽をのばしてから、出発しようね」

「ああ」

アジエは国をめぐるのと決めたと同時に、もうひとつやりたいことができたのだ。

ロナウドの治める国が、その御代が安泰であるように、すこしも影で働ければいいと。『アリス王女』の仕事から逃げ出した自分を許してくれた彼に、恩返しがしたいのだと。

実際、『アリス王女』としての力はなくなっていない。ラシルに与えたと思っていた力も、エダ曰く、徐々に抜けてアジエへ還るのだそうだ。そうとなれば、やはりただあまりある強大な力をなおざりに放つてはおけない。だからこそ、ロナウドのために、国を護るために使いたいのだ。

エダはすこし不満そうだが、結局なにも言わない。彼は気まぐれにやさしいのだ。

「あーあ。気に食わないのにい。あ！ おっちゃん、おかわり！」  
ふう、と息をついてから、エダは思い出したように店主を呼ぶ。  
いつの間にかおかわりは五回目だ。

「……最近、よく食べるな」

「そ？ ま、気にしないでよ」

肉を頬張りながらにつこりする少年だったが、アジエは気になつていた。それに、気にしないでいられない……。

懐が寂しいのだ、と打ち明けた瞬間、エダは目に見えて愕然としていた。

「つまり……稼ぎがないと、ね」

ハビヤの村へ出発する前に、お金を貯めようということになったのは言うまでもない。

……そして、「仕方がないから、僕のかわいい顔でひと儲けしようか」なんて冗談に聞こえぬ冗談をにつこり笑顔で言い切ったエダ。彼を思わず二度見した後、凝視するアジエの姿に、店主が同情のまなざしを向けたのだった。

(2)

その招待状が届いたのは、地道な稼ぎに自分たちが向いていないと痛感してから三日経った日のことだった。

「あんたらに手紙だよ」

気前のいい女将のいる『華碧い』という宿屋に身を置いて三日目の夜、気の毒そうな表情で真っ白い封筒を渡されたのだ。充分に空腹を満たすことができずにいたエダは機嫌が悪いのか、いつもの笑顔は影を潜めている。

ふたりの怪訝な顔を見て、女将はため息まじりに教えてくれた。

「差出人を見てごらん。《仮面の主人》からだろうか？」

「言われ、くるりと裏返すと、たしかに差出人が《仮面》となっている。」

「仮面？ 随分しやれたヒトだねえ」

「坊っちゃん、笑いごとじゃないよ。あたしゃ、気をつけた方がいいと思うけどねえ」

女将はエダを『坊っちゃん』と呼ぶが、はじめて彼を見たときは『お嬢ちゃん』と呼んでいたのをアジエは忘れていない。人懐こいエダを気に入ったのか、女将は随分気にかけてくれる。

「なかには《仮面の男》だとか《仮面の君》だとか《仮面の伯爵》だとか、たいそう妙な名で呼ばれているけれどねえ。ほら、街からちよいと出た森の近くに、古びた洋館があるだろ？ かつての伯爵さまの別荘だったんだけど、今じゃ仮面の男の縄張りさ」

女将はこそこそと声をひそめ、話し出す。

「ここだけの話、その館では夜な夜な悲鳴が聞こえてねえ……たま  
く、あんたたちみたいに招待を受ける人がいるんだけど……帰っ  
てきたためしがないんだよ」

自身の肩を抱き、ぶるりと震える女将は役者さながらだ。

「噂じゃ、《仮面の主人》は奴隷をたくさん飼っているらしいよ……  
ほら、あんたらは小奇麗な顔をしているじゃないか！ きつと目  
をつけられたんだよ」

本当だよ、気をつけなよ！ と声高に忠告する女将に頷きながら、  
ふたりは部屋へ戻った。

「で、どう思う？」

ビリビリとさつそく封を切ってエダは招待状を読み出す。

「なんて書いてあるんだ？」

「ん」と、『貴殿を我が屋敷に招待したく思います。お越しいただ  
ければ、たくさんの謝礼金を授けましょう。明日の夜、迎えに参り  
ます 愛しいお嬢さん』……だつてさ」

「……そうか」

部屋にはしばし沈黙が流れた。アジエもエダも、一言も話さず、  
ただ互いの瞳を見つめる。

相変わらずアジエは無表情で、エダは笑みを浮かべている。彼の  
琥珀色の瞳が愉快そうに歪み、いつそう口角が引きあがったとき、  
アジエは深く息をついた。

「……困ったな」

「困ったねえ」

ケタケタと声をたてて、エダは招待状を握りつぶす。ずいぶん細  
い小奇麗な字が連ねてあったが、気に食わないことに変わりはない。  
どうやら、『仮面の主人』は『お嬢さんひとり』を招待したらし  
い。



「ね、ふたりで行つちやおつか」

悪戯を思いついたこどものような笑みを見せ、エダは一步アジエへ近づく。

たしかに、噂は気になるところだ。放置するにしても、なんだかすつきりしない。

招待されたお嬢さん　性別的にいえば、アジエが妥当だろう。

されど一目見た限りでは、アジエを眉目秀麗な青年だと勘違いすることはあれど、『お嬢さん』に当てはまるような人物だとはだれも思つまい。むしろエダのほうに『お嬢さん』にふさわしいかもしれない。

アジエも充分それを理解している。それこそ、もしも仮面の男が自分のことを『お嬢さん』などと言っているのだとしたら、それはそれで違和感だらけで気持ちが悪い。

さして気にしているわけではないのだが、エダのおもしろがるような嫌味なまなざしをひしひしと感じ、ちょっとばかり気まずかつたのである。

「明日の夜に迎えにくるってあるけどさあ。な〜んか、気味悪いよね」

肩をすくめる少年に、アジエも同意する。いったいどこで目をつけられたのか知れないが　いろいろな意味でエダの場合、ただでさえ目を引くのでやむを得ないのかもしれないが　拒否のできなような招待状の書き方にぞっとする。

それでも、エダは楽観的なものだ。

「まあ、『謝礼金をよこす』って言うてるしさ、ちよつとのサービスは止むなし、だよねえ」

「招待を受けるのに条件をつけよう。ふたりでならば館に赴くと…  
…それでどうだ？」

手っ取り早く金が入ることは、すくなくともうれしい。気味が悪いとは思ふものの、生憎アジエには年頃の娘のような愛らしい怖がり方など知識にない。なにより、腹ペコだと訴え見るからに調

子の悪いエダをどうにかしてやりたかったこともある。

ノリ気なアジエにエダもにっこりとした。

「そうこなくっちゃ！」

仕方ないから、僕のかわいい顔でひと儲けしてあげるよ

いつか聞いたエダの『冗談』がアジエの耳にふとよみがえったが、  
気づかぬふりをしてやり過ごした。

+ + +

「う、煩い煩い、黙れ！」

ばしやり、とワインを浴びせられる。次にはグラスが強い力で投げられ、頭にあたって割れた。

ズキリと痛むが、男は微動だにせず、<sup>アルジ</sup>主に頭をさげたまま返事を待つ。

「アレに連れがいただと……？　そ、そんなこと、許さない……」  
ぶつぶつ狂ったようにつぶやき、主は男を見下ろした。

「殺せ。連れの男などいらぬ。アレはきれいなまま、ここへ連れてこい。いいな、カラス」

「御意」

男　カラスは跪き、主人の手にキスを落として立ち去った。命令を全うするために。

館はおどろおどろしい雰囲気がありながら、どこか上品である。

外観は古びて恐ろしい感じは否めないが、なかはきちんと掃除されていて清潔に保たれ、広々とした部屋にはしゃれた小物が並べられている。大理石の床はぴかぴかだし、燭台の立ち並ぶ廊下は彼好みだ。暮らすには不自由なく、豪邸と謳われても違和感はない。

そんな館の主はひとりの男で、カラスは彼に仕える奴隷だった。頭から流れているどろりとした濁った血を拭い、ふう、とカラスは息をついた。

怪我はさほど気にしない。じきに治癒するだろう。

気になるのは、これからのこと。主人の客人を迎えに行かねばならぬ、ということだ。

「殺シはあ、楽しいけどお」

ペロりと自身の血を舐めて、彼はつぶやく。

「男の血は好きじゃねえなあ」

空には丸い月がぼんやりと顔をのぞかせている。厚い雲が闇の色を吸いとって黒々と垂れ込めていた。

バサリ、と羽音が響く。漆黒の翼が、夜の闇へと溶けた。

ひやははと奇妙な高笑いとともに、カラスの身体は夜空を滑るように飛んでいく。

客人はまだ幼さの残る少女だ。確認した限り、連れの男は恋人ではないようだ。が、兄妹でもなさそう。どちらもきれいな顔立ちをしていたから、もしかすれば芸人か、奴隷だった過去から逃げてきたのかもしれない。

偶然、うつくしい少女を目にした主人はひとめで彼女をほしいと言った。曰く、『かすかに匂った』らしい。

カラス自身には感じ取れなかったが、狂うほどアレに執着している主人ならば嗅ぎつけたのだろう。心のなかで主人を『ヘンタイ』と呼んでいるのは秘密だ。

「おつ、アレか？」

暗闇に、動く影を発見する。鳥目にはキツイが、ふたつの影が確認できた。

「ハツハツ！ It's show time！」

コクゲンダ

高笑いとともに、カラスは男に向かってナイフを投げた。

銀に光る刃はまっすぐに男の細い首に向かう。客人たる少女が目を見開き、悲しみに暮れることを想像し、カラスの口元に笑みがある。

きつと男は理解するよりもはやく死ぬだろう。大丈夫、一撃で仕留めるからと心のなかでつぶやき、カラスはぐるんと空中回転して客人の身体をつかまえた。

「お嬢さん、迎えにあがりましたよ」

そのまま飛び立つはずだった。恐怖に震えあがる少女とともに、夜の空へ身を溶かして主のもとへと帰るはずだった。

それなのに。

「あらー、どこに行くんですのぉ」

わざとらしい声で、少女が問う。ぎょっとして抱えている彼女の顔を覗き込むと、愉快そうな色をチラつかせる琥珀色の瞳とかちあった。

「逃がすか！」

瞬間、ぶるりと背筋が凍る。殺気に身を翻せば、無傷の青年が投げたはずのナイフをこちらへ向けていた。

あわてて飛び退き、旋回する。

あいつは、無理だ。

予定は狂ったが仕方がない。状況をすばやく把握したカラスは、殺し損ねた男をそのままに、客人である少女を小脇へ抱えて飛び去った。

「アジエー、迎えにきてねー」

けらけらと笑いながらしゃべる少女に度肝を抜かれ。

「くそっ」

と似合わぬ悪態をつく青年に逃げ腰になりながら。

(3) (前書き)

お久しぶりです……

少し展開がはやいかもしれません。

すみません。

……で、ちょっと変態が出ます(笑)

まあ大丈夫ですが、これからはあまり前置きせずに出す場合もある  
と思うので。

では、どうぞ。

(3)

(3)

「では聞くよ。君の望みは？ 金？ 力？ 愛？」  
荒い息のまま、エダは男を見上げた。「ワタシはもちろん力だよ」と豪語する目の前の男に戦慄を覚える。

鴉の獣人によって仮面の館へ連れてこられたエダは、抵抗することなくおとなしく従った。《仮面の主人》の正体が気になったし、いったいどういうつもりで『招待』したのか興味もあった。つまり、純粹な好奇心からだ。

しかし、はやくも後悔が押し寄せる。自分の力を過信しているわけではないが、状況の読みがあまかったのは事実だ。

カラスと呼ばれた獣人はエダを主へ引き渡すと、命じられるままアジエの始末へと再び飛び去った。部屋に残されたエダは、さつき《仮面の主人》と対面したというわけである。

男はあいさつもそこそこに、いきなり《獣人殺し》の首輪で拘束しはじめたのだ。

しまった

ぎょつとして抵抗したが、身体はだるく思うように動かない力が使えないと気づいたときにはすべて遅かった。

《仮面の主人》は名前のとおり仮面をつけている。目が隠されているせいで顔の造形はよく見えないが、わかるのはニビ色の顎のあたりで切りそろえた髪をしていて、小柄な男であるということだけだった。

部屋は薄暗く、ほのかな明かりは燭台と暖炉にはせる小さな炎だ

け。緋色の椅子に座って紅いワインを飲みながら、男は動けなくなつたエダを楽しそうに見やり、冒頭の台詞を口にした。

「君は獣人だろう？ うまく化けてみたいんだけどぴんときたよ。匂いがちがうもの」

エダが無言を貫きとおすこともさほど気にせず、男は淡々と話し出す。

「力が思うように扱えなくて食事をたくさん摂らなきゃいけないんだろう？ 知っているよ、全部」

くすりともらす笑い声に嫌悪が募る。愛らしい顔を歪め、エダは内心舌打ちした。

はじめ、部屋に垂れこめる匂いは香水かなにかかと思つたがとんだお門違いだ。《獣人殺し》と同じ効力を発揮し、徐々にしかし確実に獣人の身体を蝕む香りなどはじめて嗅いだ。もともと満足な食事で力を補うことができなかったのもわざわざいし、気づけば《獣人殺し》の首輪で力を完全に封じられる始末。もはや抵抗らしき抵抗もできない。

自分が膝をつくなんて腸が煮えくりかえりそうなほど許し難い。

エダはぎりぎり歯ぎしりして、絶対に目の前の男を殺してやろうと目論んだ。

そんなエダに気づいていないのか、《仮面の主人》は愉快そうに肩を揺すり、床に横たわるエダをながめて口をひらく。

「連れとは契約したのかい？ ああ、だけどそんなの許さないよ。はやく契約解除しておしまい」

ワインをぐつと飲み干し、男はつづける。仮面のなかに隠された目の表情は読めないが、見える口元は不自然に笑みのかたちに歪んでいた。

「君もわかっているだろう。契約は獣人にとって負担になるだけなんだから」



たしかに たしかに、『真の契約』を人間と結べる獣人はなかないというのが事実だ。口先だけでの『契約』なればそこらへんにいる獣人にもできるし、相棒としてともに生活することも容易い。ただ最近は獣人を力で縛り付け奴隷や観賞用とする人間が多く、人間優位な体制が常なのだが。

ともかく、血と血、魂と魂で結ばれた『真の契約』をするには獣人にそれなりの負担がかかるのだ。

「へえ……アンタ、そんなこと知っているなんて、なかなかのニンゲンだね」

脂汗を額に浮かべながら、エダは気丈に笑う。『契約』の意味を知る人間を見たのははじめてだ。

「余裕だねえ、お嬢さん」

「うっさいな。僕、男なんだよね」

ぴくりとエダの眉が不快気に動く。見下す《仮面の主人》の言葉に過剰に反応してしまったが、この際関係あるまい。

男は、仰天したようだった。しばし口をぽかんとあけ硬直したが、それもすぐに雲散する。

「へえ、本当？ ふうん。それじゃあ、好都合！」

男の声に好奇の色がまざった。椅子から立ち上がり、エダへ近づく。

「女にはうんざりだ。金ばかり、顔ばかり。ワタシを見てくれない……気持ち悪いというばかり」

興に乗った男は、エダの顎に手をかけて上を向かせ、ほほえむ。

「だから力が欲しいんだ。ワタシは獣人が大好きなのさ……研究に精を出しているのもそのため」

いちいち鼻につく物言いをするな、とエダは内心反吐が出る思いで男の話を聞いていた。獣人だと見破られたことも甚だしいが、なにより男の目に映る自分が『イキモノ』ではなく『研究対象』また

は『コレクション』のひとつであることに嫌悪した。

「ね？ いいこだから、さっさと契約解除しなさい。君が男の子ならば、ワタシが愛でてあげるから。大事に大事にしてあげる」

幼子に言い聞かせるように、男は仮面の奥でほくそ笑む。

「カラスのような駒にはしないよ。君はとつてもきれいだから。ちやんと墮として、ワタシのものにしてあげる」

《仮面の主人》はゆっくりと、愛おしげに少年の漆黒の髪をなでる。

エダは白んだ目で男を見やった。

「黙れ。下種が」

それから表情を一変、満面の笑みへとうつす。

「僕、アンタみたいな自己中、だーいつきらい」

目を細め、エダは吐き捨てた。

「僕はアジエのもの　アンタのものになんか、ならないよ」

+ + +

エダが攫われてすぐ、悪態をつく暇もなくアジエは噂の館がある場所へと足を向けた。

ひらひらと手を振っておとなしく攫われていく少年の姿を思い出し、アジエは怒りをとおり越してもはやあきれた。そして、やはり招待された『お嬢さん』はエダのことであつたと思い知り、ほんのすこしだけ悔しいような気分になる。

しかし、とりあえずはエダを救出しなければなるまい。

誘拐しにきたのはどうやら獣人らしかった。黒い翼をはためかせ

夜の空へと消えていった姿を思い出し、奥歯を噛む。いきなり攻撃してきたことから、敵とみなしていいだろう。相手は人間ではないかもしれないのだ。

マントをはおり、剣を携え、宿をあとにする。通りは人の気配なく、静かに寝静まっている。

ランタンをひつつかみ、駆け足で話に聞いた館への道をたどる。道程、生き物に会うことは一度としてなかった。

街はずれ、森の入口にさしかかるところで、ふいに空気を切る音がした。ほとんど本能的に飛びずさり、アジエは体勢を整えて剣の柄に手をかける。

一度見知った気配は忘れない。

びゅん、と銀のきらめきが頬をかすつたが、臆せず足を出しランタンを投げつけ獲物を取り出す。羽音とともに黒い羽根が散った。

ち、と舌打ちをして、闇夜から現れたのは先ほどエダを攫った獣人だった。

「随分な歓迎だな、誘拐犯」

「その言葉そっくり返してやらあ」

月夜の下、見えたのは漆黒の翼をもつ男。ヒトガタをとった、鴉の獣人だ。

長い黒髪は腰まで伸ばされ、細面で、ひよろりとした体系をしている。ややたれ目で、闇夜に映える紫紺の瞳や右の泣きボクロが独特の色香をかもし出していた。なにより目を引くのは、見える素肌という素肌に、全身にタトウが施されているところだろう。

「エダはどこだ」

「あの女の子？ さあ？ 館で主とオタノシミ中なんじゃない？」

アジエの無表情にしわがよった。

「あいつは、男だ」

眉をひそめて言い切るアジエに、獣人は意表を衝かれたようだったが、次第にケラケラと大笑する。

「ならお気の毒に。主人は女嫌いでも有名なんだ」

涙を浮かべるほど腹を抱えて笑った獣人は、ゆっくりとアジエへ視線を戻す。

「加えて獣人好きだから、きつと今頃アンタの連れは堕ちてるんじゃない？」

「ご愁傷さま、と目を細めて言った男に、虫唾が走った。

ぎりりと奥歯を噛みしめ剣を構えると、相手もナイフを取り出し切っ先をこちらへと向けてくる。

アジエは、言いようのない不安に駆られた。無駄な時間を過ごしている暇はない。すぐに館へ乗り込み、エダを救出しなければ心臓がひどく脈打つのだ。

「俺の名前はクロウ」

ニヤリとした笑みとともに、獣人は足を踏み出す。同時に素早い勢いで数本のナイフが放たれ、闇を纏い襲う。

それらをすべて剣ではじき、身を沈めてアジエは地を蹴った。刃と刃がぶつかる。

武器はナイフと剣。接近戦ではあきらかにアジエのほうが有利だ。されど、相手は獣人。身体能力も洞察力も人間とはちがう。加えて相手には翼もある。

だが。

「貴様に名乗る名などない！」

吠えるとともにアジエは剣を振るう。余裕でよける相手の隙を探り、土をひつつかんで向こうの顔めがけて投げつけ、蹴りを入れる。地に手をつけてぐるりと一回転。僅差でかわした男の懐に休む間もなく飛び込む。

そのはやさは、人間のできるスピードではなかった。

片手で身体を支え、そのままにアジエは軸として足払いをかける。よろけて咄嗟につこうとした男の手をはじき、身体をひねって馬乗りになると、倒れ込む相手の顔面すれすれに剣を突き刺した。

肩で息をした獣人の、驚愕の表情が見えた。

「わたしは生憎　独占欲が強いんだ」

相棒をかえしてもらおうよ、と言ったアジエ。クロウはとつとつ両手を挙げ、苦笑とともに降参を告げたのだった。

(4)

アジエを仮面の男の館へ案内したあと、鴉の獣人・クロウは夜空へと飛び立った。曰く、命令を実行できぬ奴隷は用なしで、ご主人さまからのお仕置きが怖いから逃げるのだとか。

先刻まで殺そうとしていた人物に笑顔で「気をつけるよオ」なんて言つてのける様はさすが獣人でもいうのだろうか。終始飄々とした態度に翻弄されながらも、アジエは今は構つてられぬとばかりに適当にあしらい別れを告げた。

先ほどから、どんどん胸が苦しく迫るような痛みを訴えている。いやな予感に苛まれ、ただ心はエダを呼んでいた。

館はしんと静まりかえっていた。きしんだ扉はすぐに閉まり、アジエを内へと追い立てる。

大理石のぴかぴか光る廊下を歩く。ふいに引かれるように、ひとつの部屋の扉を躊躇なくあけた。

薄暗い部屋だ。緋色の椅子があり、木のテーブル上には飲みかけのワインがグラスに注がれたまま置かれている。

アジエは眉をひそめた。

急かされるように部屋をあとにし、勘の告げるままにエダのもとへと足を進める。はじめて訪れた場所にも関わらず、迷いなく歩を運ぶ。そこに疑いはなく、ただ自分の直感を信じればいいという漠然とした思いがあった。

階段を駆け上がり、長い廊下をよどみなく行く。いつでも攻撃できるよう常に剣の柄を握りしめ、息を殺して館内を探った。

二階、いちばん奥の部屋から、コトリとかすかな物音がした。研ぎ澄まされた感覚は、迷うことなく道を示す勘は、きつと『アリス王女』の力なのかもしれない。

アジエは気配のする部屋の前までくると足をとめた。

はやる気持ちを押しとどめ、沈黙のうちに深呼吸する。冷静さを欠くわけにはいかないのだ。

ドアノブへ手をかけ、ゆっくりと回す。息をつめる。

「やあ、ようこそ　我が研究室へ」

そこにいたのは、ひとりの男。足元にうごめく影。床に散らばる、何体もの、影。

部屋にある明かりは、燭台の炎のみ。やはり薄暗く、しかしぼつと浮かび上がる男の顔がアジエにははっきりと見て取れた。

顎のラインできちつと切りそろえられたニビ色の髪に、やや丸顔であろうか、それでも顎はすつと尖っているように見える。男は橙色の仮面をしていた。

「おまえが《仮面の主人》か」

「いかにも。マークスという名だが……今じゃあまり呼ばれなくなつたな。ああ、君のほうが『お嬢さん』だったんだね」

唸るように問えば、男は動じることなく答え、さらに名乗る。

「さて、君にいくつか質問があるのだが……ここがどういった部屋か、わかるかい？」

両手を広げ口元に笑みを浮かべながら尋ねる仮面の男。

彼の足もとに散らばっているのがなんであるか、アジエにはすぐにはわかった。薄暗いにも関わらず、夜目の利く眼はそれをきちんととらえた。

「わかりたくもない」

冷たく言い放つ。怒りがふつつふつとわきあがる。

部屋には様々な拷問具があった。鞭、手錠、檻……散らばる影の正体は、無残な死骸だった。

「ここはワタシの研究所だよ。力にあふれているだろうか？」

うつとりと話し出す《仮面の主人》 マーカス。

たしかに部屋には濃厚な香りが充満していた。獣人の腐臭を消し去るほどの、濃くあまい、鼻をつく香りが。

「さあ、部屋へお入りよ。ワタシは待ちくたびれたんだ！」

入るよううながし、マーカスはクスクスと笑い出す。

「カラスは裏切り者だからね。あとでお仕置きしなくっちゃ……君が生きていたことは誤算だったけれどね、でも、『彼』の言葉どおりちゃんと生きてここまでこれたことは、まあ、うれしいことだよ」  
一歩足を進めれば、獣人たちの死骸が目に入る。

犬、蛇、狐、魚……様々な種の死骸が散らばっている。見るも無残で、どれがどれだかわからないのがほとんどであるが、特徴がそのまま残っていた獣人は、かろうじて種が判別できた。蛇の獣人は半分獣化したままで、瞳孔は開かれ長いチロチロした舌が口からたれている。狐の獣人は頭が獣、下半身は人間のやはり半分獣化した途中の姿で、ぴくりとも動かず冷たく横たわっていた。白目を剥いたモノ、痙攣を繰り返すモノ、身体の一部が除かれているモノ……血が蔓延り、人型の皮膚や獣型の毛にこびりつき、あまい香りに混ざって鼻をつく腐臭が漂っている。

むごい、と単純に思った。これはもはやイキモノの成りの果てではない。

顔をしかめたアジエに、マーカスは満足そうな声をもらす。

「どうしてワタシが獣人の研究をしているか教えてやろう。力が欲しいからさ！」

聞いてもいないのに、彼はぺらぺらとしゃべり出す。

「獣人は未知の力を秘めているのだよ。魔法のような、凄まじい力さ！ 人間はたしかに《獣人殺し》を手に入れたけれど、それも完



全じゃないだろう？ 求めるのは絶対的な畏怖の力…… そうだな、たとえば『アリス王女』みたいな、そんなあやふやな力もいいかもしれない」

「……胸糞が悪い」

「ふふ、汚い口のきき方…… 調教してあげようか？」

《仮面の主人》の年ころは把握できない。声から老齢しているのかと思えば、時折こどもっぽい笑い方をする。

不可解で不愉快極まりない アジエは低い声で問うた。

「無駄口をたたきにきたわけではない。エダをかえしてくれ」

アジエの言動が予想外だったのか、男はしばしきよとんと首を傾げる。

「ほう。『謝礼金』を受け取りにきたのではないのか？」

「そんなものはいらない。さつさと」

「無理だ、アレはワタシが買ったのだ」

アジエの言葉を遮り、言うなり、マーカスはどさりと巾着袋を投げてよこす。コインの落ちる音が響いた。

「どういう、つもりだ」

「賢いと思ったのに、意外と馬鹿なのか？ 金だよ。『謝礼金』さ。」

『彼』はワタシのものだ」

用事は終わりとばかりに男は手を振って帰宅をうながす。

「たしかに君はおもしろい。『彼』の言ったとおり、生きてここまですてやってきた。だからさらに『彼』を追い込むために使ってやろうと思っただけ……でも、なにより金目当てじゃなかったみたいだし、がっかりだよ」

それじゃあ使えない、とため息まじりにもらす男に、アジエの眉根はさらによる。

「でもまあ、それもどうでもいいや。彼はたった今墮ちたところだしね」

クスクスと口の端をひくつかせて小気味よいと微笑するマーカス。いちいち癪にさわる男だが、しかし 今、彼はなんと言った？

「『彼』をかえして？ って、取り戻すつもり？ 冗談はやめてくれよ。ワタシは『彼』が、自分よりも金を選ばれたことに絶望するのを見たかったんだ。ほら、その瞬間の表情を想像すると、ぞくぞくするだろう？」

「もしも、男のさす『彼』が『エダ』を示しているならば。」

「それに、君は人間、しかも女。ゾツとするから、さっさと出て行ってくれ」

「……エ、ダは……」

どくん、と心臓が唸る。

「そうだ、こんなことをしている場合ではない。エダはどこだ。彼の姿が見えない。」

「ああ、『彼』？」

「マーカスの顔に再び笑みが見える。」

「とっても頑固だったよ。本来はきつと力の強い獣人なんだろうね……まだ種は特定させてくれないけれどさ」

「ずっと彼は身体を脇にどけ、部屋の奥を見えるようにした。同時に、パチンと指を鳴らす。それに呼応するように、部屋の明かりがぼんやりと灯った。」

「知ってたかい？ 獣人との『契約』にまつわる『法則』。君、きちんと与えてなかっただろう？」

「男の足もとに散らばる獣人の死骸。エダは、獣人……。」

「ぐるぐると頭をめぐる単語に、アジエは吐き気がした。」

「遅かったねえ……もうすこしはやければいい瞬間を見られたのに……」

「部屋の奥には、大きな檻があった。いつか見た。はじめてエダと会ったときと同じ光景がよみがえる。」

「手錠をかけられ、吊るされた少年。衣服はぼろぼろで、腕は力なくたれている。細く白い首には、赤い首輪がはめられていた。」

「ほら 堕ちた」

うなだれる頭。白い肌には緋アカい線がいくつも走っている。  
赤い首輪がドク、ドクと脈打つようにおぼるげな光を放っている  
のに気がついた。

「そ、んな……エダ……」

どうしてこんな姿に？ 孤獣は無敵ではないのか？  
がくりと膝をつき、目を見開く。

マーカスは構わずぴくりとも動かない少年へ近づき、彼の顎に手をかけ顔をあげさせた。

「ほら、大丈夫だ。きれいな顔には傷一つないんだから」

アジエの目の前で、《仮面の主人》はうっとりとして、愛おしげにエダの頬をなでる。

エダは完全に気を失っており、真つ蒼な血の気のない顔でされることがまだ。

「この首輪なんて最新式なんだ。死ぬぎりぎりの位置まで獣人の生気を吸いつくす……素敵だろう？」

脈打つように光る赤い首輪。それが示す意味を知り、アジエは怒りに震えた。

ふざけるな。

マーカスはやや乱暴にエダの前髪をつかむと上を向かせたまま、アジエに向き直る。

「これからオタノシミの時間なんだ。今まで『痛み』をあげたから、今度はたっぷり『快感』をあげなくちゃいけないだろう？」

ニタリ、と口元が笑う。仮面に隠れた瞳が愉快そうにこちらを見ているのを知り、アジエは憤怒にぼんやりした頭のなかで悲鳴をあげた。

さわるな！ その手で、エダにさわるな！

目をとじる。押さえられぬ怒りに、自分がこんなにも感情的になれることを知った。

マーカスはアジエの変化に気づいていないのか、高らかに笑いがらつづける。

「君にも聞くよ。なにが望み？ 金？ 力？ それとも愛？」

目をひらく。ただ、まっすぐにエダを見つめた。

漆黒の髪をもつ、うつくしい少年。その琥珀色の瞳は、決して濁って欲しくない。

「わたしは……わたしが欲しいのは カナシミ」

瞬間、わずかにエダが身じろぎしたのを、アジエの瞳はとらえた。

「カナシミ……？」

呆気にとられたのか、マーカスは言葉を繰り返す。彼の瞳は興味があいた、という色で満たされていく。されどそれすらアジエの気を引くには至らない。

彼女の視線は、目の前の少年から外れない。

「あ……アジエ……」

ぼつりと少年からこぼされた言葉。朦朧とした意識のなかで、けれど彼はほえんだのだ。

果たしてそれがどのように作用したのかアジエは知れない。ただ、もう抑えることができなかったのはたしかだ。

「エダ」

一気に昇りつめた力が、解放され 爆発した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7512m/>

---

女神のティア

2012年1月9日23時52分発行